



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「涿鹿」の歴史は誰のものか : 「炎黄」顕彰問題と二十世紀末中国民族主義の諸相
Author(s)	吉開, 将人
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 150, 1(右)-75(右)
Issue Date	2016-12-15
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.150.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63891
Type	departmental bulletin paper
File Information	150_02_yoshikai.pdf



「涿鹿」の歴史は誰のものか

——「炎黄」顕彰問題と二十世紀末中国民族主義の諸相——

吉 開 将 人

はじめに

北京から車を西北方向に走らせ、「万里の長城」を越えてしばらく行くと、涿鹿県に入る。やがて、それまでの典型的な農村風景とは不釣り合いな巨大な施設が、彼方の丘の上に姿を現す。ミサイル発射基地に迷い込んでしまったかと当惑させるその光景は、^①一九九〇年代から今世紀初めにかけて、地元涿鹿県が郷土の歴史を顕彰して築いた、巨大モニュメントとその関連施設が生み出したものである。

附近には「黄帝城」と呼ばれる都市遺跡が城壁遺構と共に現存し、その横には「黄帝泉」という大きな泉がある。また、モニュメントの東南二キロメートルには「蚩尤泉」という古井戸があり、傍らの丘の上には「蚩尤寨」と刻ま

「涿鹿」の歴史は誰のものか

れた石碑と土壁の残骸が残る。この地域一帯が、古の「黄帝」「蚩尤」の伝承地であることを知る。

「涿鹿」という地名は、遅くとも前漢時代にはこの地と関連付けて現れた。⁽²⁾ 歴史家の司馬遷もまたこの地を訪れている。司馬遷は、『史記』と今日呼ばれる著作を、諸子百家の説や民間伝承によつて儒家の經典の記述を検証しながら書き上げたと自ら記す。⁽³⁾ 『史記』の冒頭に登場する「涿鹿」の記事も、おそらく彼が現地で得た伝聞を交えて書き記したエピソードと思われる。

「涿鹿」の記事とは何か。それは「五帝」の筆頭、最古の帝王とされる黄帝が、「阪泉之野」・「涿鹿之野」で炎帝・蚩尤と戦い、勝利して「天子」に推戴されたという出来事である。⁽⁴⁾ 清末に反満（洲）思潮が高まる中で、黄帝は漢人（漢民族）の象徴として仰がれるようになり、ひいては炎帝とセットで「炎黃子孫」（炎帝・黄帝の子孫）と自らを歴史的に位置付ける考え方が流行・定着した。冒頭で述べた巨大なモニュメントと関連施設は、こうした思想を背景に、黄帝を軸とした「中国史上初の戦争」を「歴史」として記念し、その古戦場に築き上げられたものである。

もつとも、それを年代的に換算すれば今から四千数百年前ということになり、言うまでもなく伝説上のエピソードではない。古代史の研究テーマとしてそれを扱うのは全く無意味なことである。ところが、以上で紹介した歴史的経緯を踏まえ、このモニュメントが持つ意味を今日の中国社会の中に求めようとするなら、それを取り巻く諸問題は、現代中国史の重要な研究テーマとなる。以下で明らかにするように、その建設は二十世紀末の中国大陆における民族主義思潮の複雑な構図を歴史的背景として行なわれたものであるからである。ところが不思議なことに、観光開発の成功例として地方活性化の視点から論ずるもの⁽⁵⁾以外、このモニュメントや関連施設を主題として客観的な分析を試みた論考は、管見では皆無である。

さらにこれらの建造物の建設過程を調べてみると、それが地元涿鹿県や北京の国家中央・国家アカデミーの意向だけでなく、はるか南方の辺境地域に暮らす少数民族、苗族（ミャオ族）の社会的エリートたちの強い意向を汲んだものであることが判明する。このことについては、苗族のアイデンティティの構築過程について研究する民族学・人類学・民俗学者たちによってすでに関心が寄せられ、幾つかの論考が発表されている。⁽⁶⁾しかし、これらはあくまでも苗族のアイデンティティのあり様への関心から、それを探究するための素材の一つとして涿鹿をめぐる諸事象に言及したものに過ぎず、論者の多くは涿鹿への関心さえ欠いている。

これ以外には、文化表象の事例研究として、蚩尤をめぐる歴史認識の変容過程について考察した専論があり、その中で涿鹿のモニュメントや関連施設の形成過程や、それをめぐる言説を読み解く試みがなされている。⁽⁷⁾涿鹿に目を向けた議論として注目すべき成果であるが、現代社会の中での文化表象の変容という、あらかじめ設定されたゴールに向けて展開された議論であるため、それがなぜこの時期にここに出現しなければならなかったのかという、歴史的問題意識を欠く。また、前述の苗族エリートなど、それに関与した様々な当事者たちの動きが十分に意識された分析はなっていない。

本論文では、以上の認識に基づき、涿鹿そのものに視座を設定し、涿鹿県・国家中央・西南中国を舞台とした、地方幹部・中央幹部・国家アカデミー・苗族エリートなど複数のアクターたちの動向に注目する。彼らが太古の伝説時代である涿鹿の「歴史」をめぐる繰り広げた動きを、文献史学の手法によって跡付けることで、現代中国において歴史言説が果たす役割が浮き彫りとなろう。「歴史」が今日の中国においていかなる意味を持ち、「歴史認識」がどのような社会や国家と接続するのか、党中央や大都市ではない視点から、その実態を読み解きたい。⁽⁸⁾



写真1 「中華合符壇」(2014年12月)

一、涿鹿——「中華三祖」顕彰への道

(1) 涿鹿樊山鎮のモニュメント

問題のモニュメントと関連施設は、今日の行政区分で言うと河北省張家口市の属県の一つである涿鹿県の樊山鎮三堡村に展開する。モニュメントが設置されているのは、九万九千九百九十九平方メートルの方壇（高さ六メートル）の上に円壇（高さ不明）が築かれた、「中華合符壇」と呼ばれる構築物の直上である。円壇上には五十六本の石柱（高さ九・九メートル）が円形に配され、その中央に九匹の龍の彫像が一つの球体を銜えるモチーフの、巨大なモニュメント（高さ五四メートル）がある【写真1】。石柱は、中国各民族を象徴するトーテムポールであり、基壇そのものは、黄帝が「釜山」の地で諸侯を集めて主宰したとされる「合符」の故事を典故とする。この中華合符壇は、二〇〇五年に立案され、二〇〇六年四月に起工、二〇〇八年八（九）月に竣工し（基壇のみ）、最終的には二〇一〇年八月に完成を見たものであると^⑩言う。

この合符壇の北側には、それと向き合うように、「中華三祖堂」という宮殿式の建築物がそびえ立ち【写真2・3】、建物の中には炎帝・黄帝・蚩尤の巨大な塑像が鎮座する【写真4】。一九九四年四月に起工式が行なわれ、一九九七年十月に建物と塑像が竣工し、「中華三祖堂」と名付けられたものであると^⑪言う。



写真3 「中華三祖堂」扁額



写真2 「中華三祖堂」遠景

(2) 涿鹿の「黄帝祠」

この地が、遅くとも前漢時代までに「涿鹿」と呼ばれるに至っており、また司馬遷が『史記』の中で黄帝と炎帝・蚩尤との戦いを記録したことについては、すでに述べた通りである。その記事が伝説に過ぎないことは言うまでもないが、そこに黄帝を祀るための「黄帝祠」が実在したことについては、すでに漢末・西晋・北魏時代の記述に見える。北魏の皇帝が繰り返し現地を訪れて黄帝を祀っているのも、相当の規模の施設が当時そこに存在していたことを示唆する。黄帝祠は一九五〇年代まで廃墟が残っていたようであるが、今日、現地にはその痕跡を確認することはできない。

この涿鹿県では、早くも一九八〇年代には県政府による郷土史再評価の活動が始まっていた。しかし、語られるのは「黄蚩之戦」であり、主体は「黄帝城」などの黄帝伝承地と、その関連地点としての「蚩尤泉」「蚩尤寨」である。⁽¹⁵⁾一九九四年四月には、後の中華三祖堂の起工式が行なわれ、それ以後、関連する印刷物が地元で幾つか世に出されているが、当初そこで強調されたのはやはり「炎黄史跡」「軒轅黄帝」に過ぎなかった。⁽¹⁶⁾

ところがその後しばらくして、涿鹿県では、一九九五年九月二五～二八日に全国の専門家を集めて「全国第一次涿鹿炎帝・黄帝・蚩尤三祖文化研讨会」が開催される【写真5】。そして一九九七年十月四日には、礬山鎮三堡村で中華三祖堂の竣工式が挙行政

「涿鹿」の歴史は誰のものか



写真4 「中華三祖」塑像（左から蚩尤・黄帝・炎帝）

れたのである。¹⁷⁾そこに新たに見えるのは、「黄帝」「炎黄」ではなく「中華」三祖という、それまでになかった概念である。

(3)「三祖」とは何か

この「三祖」という概念をめぐって、中国共産党（以下「中共」）涿鹿県委員会副書記の任昌華は、以下のようにその意義を総括する。

中華民族の歴史文化を論ずるには、通常「炎黄文化（炎帝・黄帝の文化）」を正式名称とする。一九九三年十月、私は炎帝・黄帝・蚩尤の涿鹿における遺跡と史書の調査検討に基づいて、初めて「炎黄蚩三祖文化（炎帝・黄帝・蚩尤三祖の文化）」という観点を提出した。一九九五年九月には、この命題について「全国首届涿鹿炎黄蚩三祖文化學術研討会」を開催した。これより、中華民族文明の根幹に関係するこの新しい命題は、正式に社会の広汎な関心と理解を受けることになり、また国内外で強い反響と高い注目を引き起こした。では、何を「三祖文化」と言うのか。第一に、中華民族の文明の始祖は三人であり、二人だけではない。すなわち炎帝・黄帝と蚩尤である。……第二に、中華民族の文明の始まりは炎帝・黄帝・蚩尤の三祖およびその「三者それぞれが」代表する部族が連合して共に創り出したものである。……第三に、炎帝・黄帝・蚩尤の三祖が中華民族の文明を創始した当初、「三祖の」足跡は全国の大部分の地域に広く及んだが、最も重要で最も決定的な役割をそなえた出来事は涿鹿にお



写真5 「全国首届涿鹿炎黄蚩三祖文化研讨会」(1995年9月・涿鹿)

いて完成されたのである。……我々が「三祖文化」の観点をもつて歴史を見きわめ、今日に向き合い、未来を導くことの意義は、きわめて深く、重大である。「そのためには」第一に、蚩尤の名分を正し、歴史に公正を取り戻して、中華文明史をより一層完璧で光輝くものとする。……現在我々が「三祖文化」の観点をもつて歴史を見き

わめることは、当然ながら数千年来の蚩尤に対する不公正な評価を否定し、蚩尤に付加された不正確なレッテルを剥がすことになる。過去に蚩尤を「怪物」「敗賊」として批判してきたことを改め、文明の始祖として敬い崇めるのである。この意義から言えば、中国の歴史教科書と正統なる文献は、遅かれ早かれ修正あるいは補足されなければならない。……第二に、炎帝・黄帝・蚩尤は〔我々中華民族の〕共通の祖先で、各民族は同根であり、それは民族団結と祖国統一の利となるものである。……歴史的文献の多くはみな、黄帝・炎帝の末裔としての華夏〔中華〕大漢民族主義の立場に立っていたために、蚩尤を始祖の〔範疇の〕外に排斥したのみならず、蚩尤に対して歪曲と間違いをなし、わが民族大家庭の中にある少なからずの兄弟民族に不愉快・不満を感じさせてきた。わが国においては、黎族・苗族・水族・布依族・瑶族など、幾つかの外来民族を除いた大多数の少数民族が、いずれも蚩尤を始祖として崇拝しているからである。このようでは、我々中華民族の大家庭に、根を異にし、和合しないという現象が当然現れることになる。……ゆえに、「三祖文化」を堅持し、弘揚することは、民族団結と祖国統一の利となり、

「涿鹿」の歴史は誰のものか

党の民族政策や、全国の各民族人民および海外華人の、国を愛し祖先を敬うという共通の願いに合致するのであり、中華民族の凝集力を高める工程として、民族の団結や国家の強盛化に大きな意義を持つのである。（任昌華「簡談「三祖文化」」一九九七年）⁽¹⁸⁾

この文章が執筆され発表されたのは、前述の「中華三祖堂」が起工し竣工するまでの時期である。この中で、任昌華は以下のように説明する。「三祖」という概念は、一九九三年に自分が発案した新概念で、目指したのは、「炎黄」を相対化し、蚩尤を並立して歴史的に位置付け、それによって涿鹿を顕彰しようとする点であり、それは従来の漢族中心の伝統的な「大漢民族主義」的思想を反省し、今日の多民族国家中国に見合う、非漢族をも含むことが可能な、新たな意義付けを求めた結果であった、と言うのである。

(4) 任昌華とその周辺

任昌華は、一九四六年に地元涿鹿県で生まれ、一九六五年に人民解放軍に参加、一九九二年十一月から二〇〇〇年三月まで中共涿鹿県委員会の第七期・第八期委員会副書記を歴任した人物である。⁽¹⁹⁾先に紹介した「簡談「三祖文化」」の中で自ら述べているように、彼は涿鹿県における炎帝・黄帝・蚩尤の史跡や歴史についての調査成果を踏まえ、一九九三年十月に「三祖文化」の観点を提出し、さらにその基礎の上に二〇〇一年、「合符文化」の観点を提起した⁽²⁰⁾。前述の中華合符壇もまた、任昌華の構想に関係するものだったのである。

涿鹿県の地方志所載の伝記にも、一九九二年以来、任昌華は余暇を割いて黄帝と蚩尤の故事について地元各地を踏

査し、その成果が「三祖文化」の観点であったと記されている。⁽²¹⁾ 一方で、涿鹿県は一九九二年に地域史研究を構想、国家アカデミーの中国社会科学院歴史研究所元所長の李学勤に意見を求め、李学勤は社会科学学院の専門家を集めて討論させ、研討会の開催を涿鹿県に提案、その結果、李学勤も参加して後に開かれたのが、前述の「三祖文化學術研討会」であった、とする記事も見える。⁽²²⁾

一九九二年は、任昌華が涿鹿県の党副書記に就任した年である。以上によれば、自身が述べるように、彼個人によって「三祖」というアイディアが着想され、県政府と中央アカデミズムを巻き込むことに成功し、「三祖文化學術研討会」に結実させたということになる。しかしながら、単純な地元レベルの郷土史の検証や史跡の再評価ではなく、中国の伝統的歴史観に異議を申し立て、「始祖」伝承の読み替えにより、多民族国家に見合う新たな歴史観を提出、国家中央の支持を獲得するという行動が、一人の地方幹部の独創だけによって、果たしてなし得るものだろうか。

この疑問について検討するためには、まず涿鹿において「三祖」に関連する動きがどのように展開したのか、具体的事実を明らかにする必要がある。

(5)「黄帝祠」から「中華三祖堂」へ

すでに述べたように、今日、中華三祖堂が建つ場所には、もともと黄帝を祀る黄帝祠があった。そして一九九四年に至るまで涿鹿県が顕彰を続けていたのも、「軒轅黄帝」もしくは「炎黄」に過ぎなかった。

こうした事実と任昌華の主張は矛盾する。ここで改めて、一九九三年から一九九五年にかけての涿鹿県の動向について、主に地方志の記事に基づき、詳細に検討してみることになろう。⁽²³⁾

「涿鹿」の歴史は誰のものか

一九九三年・四月、清明節に黃帝城遺跡で「公祭軒轅黃帝大会」が、県・郷・鎮の指導者出席の下に開催。七月、涿鹿県が張家口市管轄となる。九月、北京市の「環京津周辺地区調査組」の一行が涿鹿を訪問して、県政府は関係部局の責任者と調査隊との意見交換の場を設ける。十月、国家鉄道部服務中心、河北省涿鹿県軒轅黃帝泉開發公司、香港國際投資有限公司の間で、「河北華美鉅泉水有限公司」の合辦契約儀式が、中共張家口市委員會書記・中共涿鹿県委員會書記・涿鹿県長・中共涿鹿県委員會副書記の参加の下で挙行。

一九九四年・四月、シンガポール華人の周穎南が、張家口市政府の招聘で涿鹿県を視察訪問、中共市委・中共県委・県政府の指導者、北京市経協会長の李庚や記者らが同行して、「黃帝城旅游開發区」を視察、黃帝祠重建の起工式を行ない、「中華文化、始于涿鹿」「炎黃子孫、万里同根」と揮毫。周氏は県政府に「黃帝城旅游区」の開發のために百萬元を寄付、「涿鹿県軒轅〔黃帝〕文化研究会」終身会長、「炎黃子孫開發黃帝組織委員會」榮譽主席となる。五月、県政府は「中華始祖文化村規劃方案」報告会を北京の国家旅游局で開催、専門家や国家幹部に意見を求める。六月、「学習周穎南先生、捐資開發黃帝城」動員大会を開催、中共県委・県政府は「関于學習周穎南先生、開展為開發建設黃帝城捐款活動的決定」を発表、当日の募金は四十四萬元あまりに到達。十月、張家口市副市长らが涿鹿県を視察訪問、中共県委副書記の任昌華らの同行で黃帝城を視察。同月、「河北省炎黃文化研究会」の一行三人が、河北省炎黃文化研究会の委託を受けて涿鹿県を視察訪問、「涿鹿県炎黃文化研究会」執行会長・副県長の王玉書らの同行で黃帝城・釜山などの史跡を視察。同月、中共中央委員で元貴州省

省長、現貴州省人民代表大会主任、全国人民代表大会民族事務委员会主任の王朝文が涿鹿県を訪問し、蚩尤寨などの史跡を重点的に視察。王朝文は、中共県委副書記の任昌華、副県長の王玉書と、黄帝城・蚩尤寨の開発について意見交換。

一九九五年…九月、「全国首届黄炎蚩三祖文化學術研討会」が、「中国先秦史学会」・「中華炎黄文化研究会」および張家口市・涿鹿県政府などの共催で、涿鹿県城で開催。

これによれば、任昌華が「三祖文化」概念を提出したと言う一九九三年には、注目すべき出来事が確認される。彼が「三祖文化」概念を提出したと主張する時期より半年ほど前に、涿鹿県で「軒轅黄帝」の「公祭」（政府主催の公式祭祀）が行なわれ、政府主導の顕彰活動が始まっていたことを知るのである。これ以前の記事には、こうした活動は一切確認できない。

そして、年表に見るように、翌一九九四年の四月に「黄帝城旅游開発区」で盛大に行なわれたのも、「黄帝祠」重建（再建）の起工式である。一九九四年四月以前において、涿鹿では「黄帝」「軒轅」「炎黄」に関わる動きしか確認できず、それ以外の意識が読み取れる関連活動は、中央の国家旅游局と結び付いた、同年五月の「中華始祖文化村」をめぐる構想発表までは全く見当たらない。

この時期の出版物を見ても、一九九三年一月に脱稿され、一九九四年四月に刊行された『涿鹿県志』に、蚩尤を含めた伝承や古蹟などの記述はあるが、顕彰されるのは黄帝のみであり、「三祖文化」という発想は全く読み取れない。興味深いことに、その刊行に際して同書に急遽付されたと見られる「志補（一九九四年五月）」には、シンガポール華



写真6 周穎南「開發黃帝城」寄付（1994年4月・涿鹿）

人である周穎南（福建省仙游県出身）から、同年四月に涿鹿県人民政府に対し、「黃帝城」の開發に特化した目的で百萬元の寄付がなされ【写真6】、周氏の列席の下、「重建黃帝祠奠基儀式」が行なわれたことが記されているのである。²⁴これは、上の地方志記事に基づく時系列的整理とも符合する。

周穎南が一九九四年四月の起工式で語った祝辞の中にも、「涿鹿黃帝城修復の海外の最初の發起人として、共に黃帝祠の起工式のために最初の鋤入れを行ない、非常に光榮に思う」という文言が見える。²⁵周穎南はこの起工式で「炎黃子孫（炎帝・黃帝の子孫）、万里同根」という揮毫も残している。²⁶この時点で、顯彰の対象が「三祖」でなかったことは明らかであり、一九九四年四月の段階では、今日の中華三祖堂の地に黃帝祠が再建されようとしていたと理解せざるを得ないのである。²⁷

先に述べた通り、その後一九九七年十月に中華三祖堂の竣工式が行なわれた。一九九四年四月から一九九七年十月の間に、「黃帝祠」から「中華三祖堂」への転換が図られたのは明らかである。涿鹿県は、この間に黃帝顯彰から三祖顯彰へと舵を切ったのであり、一九九五年九月に全国の専門家を集めて開催された「全国首届涿鹿黃帝・炎帝・蚩尤三祖文化學術研討会」は、それを象徴する出来事であった。

それでは、こうした一連の動きは、果たしてどのように出現したのであろうか。

(6) 涿鹿の代弁者——中共北京市幹部の李庚

まず注目されるのは、一九九四年四月の黄帝祠再建の起工式が「黄帝城旅游開発区」で行なわれたという事実である。「黄帝城旅游開発区」が具体的にいかにして出来たかは不明だが、その前年、一九九三年四月に涿鹿県が「公祭軒轅黄帝大会」を主催したと、何らかの関係を持つものと見るのが自然であろう。

そして上記の年表に見るように、「黄帝城旅游開発区」は、一九九四年五月に「中華始祖文化村」へと突然姿を変えた。涿鹿県が北京の国家旅游局に出向いてその構想を発表したのである。それまでの地方県レベルでの黄帝顕彰の動きが、国家中央との連携を模索する中で、涿鹿と中央とを結ぶ「代弁者」としての役割を果たしたと見られるのが、李庚という人物である。上記の年表に見るように、地方志記事には、一九九四年四月の周潁南訪問の随行者として「北京市経協会長李庚」の名が確認される。一方で、一九九五年十一月に貴州省の記者が「首都社会経済発展研究所副所長李庚」にインタビューした新聞記事があり、それによると、一九九三年九月、中共北京市委員会と北京市政府の委託を受けた李庚は、北京周辺地域の経済開発について実地調査を進め、涿鹿県を訪問して県の中共・政府幹部から聞き取りを進める中で、この地が炎帝・黄帝・蚩尤の戦場であることを知り、一九九四年四月に至り、蚩尤を炎帝・黄帝と同等の始祖として「中華始祖文化村」を涿鹿県に建設する構想を提出、国家旅游局の指導者たちの高い評価を受けたと言う。⁽²⁸⁾

以上の事実は、先に年表に示した地方志の記事とも符合する。インタビュー記事と総合するなら、李庚は一九九三年九月に北京市の「環京津周辺地区調査組」（環北京・天津周辺地域調査チーム）の一員として涿鹿を訪問、一九九四年四月に「北京市経協会長」として周潁南に随行、黄帝祠再建の起工式に参加、「中華始祖文化村」を構想し、翌五月、

「涿鹿」の歴史は誰のものか

涿鹿県は北京の国家旅游局で「中華始祖文化村規劃方案」を発表した、と理解し得るのである。

これらの史料とは別に、「中華始祖文化村規劃方案」が涿鹿県人民政府と「環京津旅游規劃組」（環北京観光開発計画チーム）の共同作成によるもので、蚩尤城・蚩尤寨・蚩尤墳・黄帝城・炎帝祠などを含むと、任昌華など県の幹部や磐山鎮の幹部から直接説明を聞いたと記す史料も存在する。²⁹そこで言う「環京津旅游規劃組」とは、前述の「環京津周辺地区調査組」を指すものであろう。

李庚という人物については、その職歴からは、中共北京市委員会の幹部で、北京の旅行業界に影響力を持った人物であることは疑いない。³⁰以上の事実からは、涿鹿県と李庚との出会いが、単純な黄帝顕彰にとどまらず、蚩尤・炎帝関連の史跡を含めた、より大きな枠組みの中で地元振興を図る道筋を開き、それがその後「中華三祖」という概念を打ち出す素地となったと推測される。平凡な一地方県が国家中央へと結び付いたのは、「涿鹿の代弁者」としての役割を果たす、李庚という存在があつたことだったのである。

李庚は発起段階でこの事業に関わっただけではなく、その後も涿鹿県との結び付きを深めていった。まず、一九九五年九月の「全国首届涿鹿黄帝・炎帝・蚩尤三祖文化學術研討会」への参加が確認される。³¹さらに二〇〇一年、中国初のオリンピックが二〇〇八年八月に北京で開催されることが決まると、中共北京市委と北京市政府は「北京オリンピック経済研究」プロジェクトを立ち上げ、関係機関・専門家を動員して組織的な調査研究を進めたが、二〇〇三年に刊行された成果報告書を見ると、オリンピック開催が旅行産業の発展に与える経済効果などについて検討するワーキンググループの責任者として、李庚の名が確認される。そして李庚による報告には、ギリシアでの聖火採火式に代えて、中国独自に聖火採火・配分の儀式を挙行すること、「三祖文化」を誇り中華民族の発祥地たる涿鹿に「中華合符



写真8 2010年3月の「中華合符壇」



写真7 「中華合符壇」完成予想図
(2005年)

壇」を築き、そこで採火した聖火を五十七に分け、一つをオリンピック代表に、残りを中国各民族の代表に引き継ぎ、オリンピック会場と全国各地へと届けること、あわせて涿鹿の関連史跡の観光開発を図ることなどが提案されている。⁽³²⁾ 結果的に、聖火は従来通りギリシアで採火され、涿鹿は国内の聖火通過点にさえ選ばれなかったが。⁽³³⁾

任昌華が「合符文化」を提唱したのは二〇〇一年であるとされる。⁽³⁴⁾ 涿鹿県政府も二〇〇五年に中華合符壇の完成予想図を発表している【写真7】。中華合符壇そのものの起工は二〇〇六年で、そして基壇部分だけが二〇〇八年に竣工【写真8】したことは、先に見た通りである。中華合符壇の造営事業は、李庚と涿鹿県との結び付きの中でオリンピックを意識して計画され、形を変えて実現したものであると理解すべきだろう。

もともとは郷土史的話題の材料に過ぎなかった涿鹿県の黄帝関連史跡が、任昌華という地元幹部の登用を契機に重視されるようになり、海外華人の周穎南の寄付によって黄帝顯彰を掲げた観光開発を目指す。ところが、新たに北京市幹部の李庚の支援を受けて国家中央との連携を実現し、その過程で炎帝・蚩尤を並列する三祖顯彰へと転換を図り、全国区への展開を模索する。北京オリンピック開催は千載一遇の好機となり、任昌華提唱の「合符文化」を旗印に、涿鹿県と李庚との連携が再度試みられるが、オリンピックの聖地となる夢はかなわず、わずか数カ月の突貫工事で巨大な「九龍柱」を壇上に設置して体裁を整え、一応の幕引きとなった。⁽³⁶⁾ 涿鹿のモニュメントや関連施設の形成過程は、以上のように理解されよう。

「涿鹿」の歴史は誰のものか

二、蚩尤——苗族エリートたちの声

前章では、涿鹿県に視座を据え、涿鹿県中共幹部の任昌華と、華僑の周穎南・北京市中共幹部の李庚にも光を当て、地元での素朴な黄帝顕彰が、周穎南・李庚の関与、涿鹿県政府による観光開発、北京オリンピック開催を背景に、三祖顕彰へと展開していった過程について、歴史的に跡付けた。それが、涿鹿県の地元振興、とりわけ経済・観光開発を、基本的に第一の目的としていたものであったことは疑いない。重要なアクターとして登場したのは、当事者である涿鹿県であり、それに間接的に関与した周穎南・李庚であった。

ところが、関連する史実について検討する中で、もう一つの重要なアクターの存在が注目される。涿鹿とは遙か遠く隔たる、貴州省の苗族エリートたちの動きである。

(1) 全人代民主主任の王朝文とその周辺

前章で年表化した地方志記事を見ると、一九九四年十月に、中共中央委員で元貴州省長、当時は第八期全国人民代表大会の貴州省代表で、全人代民族委員会副主任の地位にあった王朝文が、涿鹿を訪問して視察を行なっていることが確認される。注目すべき事実は、その主な視察対象が黄帝城ではなく、蚩尤寨であったという点である。

王朝文は貴州黃平県出身の苗族で、当時、貴州苗族の中で最高の政治的地位にあった人物である。その涿鹿行の同行者は、貴州雷山県出身の苗族で、『貴州日報』など地方メディアの党幹部を歴任した余正生であった。余正生はその



写真9 王朝文の「蚩尤寨」訪問（1994年10月、左三が王朝文、左四が任昌華）

経緯を以下のように回顧している。

当時北京に滞在中であった余正生は、貴州凱里市出身の苗族である中央民族大学教授の張永祥を通じ、偶然北京郊外の「苗族先祖蚩尤部落遺址」の存在を知り、それを契機に、同郷雷山県出身の苗族で当時『民族団結』雑誌の社長兼総編の任にあった李金池⁽³⁷⁾を通じ、北京社会科学院〔首都社会経済発展研究所？〕研究員の李庚への面会を果たし、その意義について賛同を得た。そして、十月二十九日、王朝文・余正生・李庚の三人で涿鹿を訪問し、県委副書記の任昌華らの案内で、樊山鎮龍王堂村の蚩尤寨・蚩尤泉などを見学した、と言う【写真9⁽³⁸⁾】。

涿鹿幹部と苗族エリートたちとの接触が、このように貴州省苗族、それも共に貴州東南部の隣県を出身地とする苗族エリートたちによって進められ、そして涿鹿と彼らとの縁を取り結んだのが、またしても前章で見た「涿鹿の代弁者」李庚であったことを知る。

これ以後、王朝文は、中央での会議などの場で、機会を探しては蚩尤について宣伝し、党総書記の江沢民とも、蚩尤が中華民族の始祖の一つであることについて話したとされる⁽³⁹⁾。王朝文ら苗族エリートたちは、なぜこれほどまでに蚩尤に執着したのだろうか。

それは、苗族が「蚩尤の子孫」で、「炎帝・黄帝の子孫」と主張する漢族とは別の伝統を誇る民族集団と自負していたからである。その歴史的経緯は、要約するなら以下の通りである。十九世紀末、前近代のキリスト教的世界史Ⅱ「普遍史」

「涿鹿」の歴史は誰のものか

に由来する民族史観が、西欧近代東洋学の発展を背景に、近代的学術の衣をまとい、東アジアの新興国、明治日本に伝来、最新学説として広く社会に影響力を持つに至った。その一つが、漢族は中国大陸土着ではなく、中央アジアもしくは西アジア起源の外来民族であり、黄帝の時代に、黄河流域の土着民族であった蚩尤率いる苗族を、はるか南方に駆逐し、それに代わって黄河文明を育んだ、という「漢族西来／苗族先住」説である。涿鹿を舞台とする炎帝・黄帝・蚩尤の戦いを、民族抗争の物語に読み替え、「炎帝・黄帝の子孫」＝漢族と「蚩尤の子孫」＝苗族との「優勝劣敗」的民族史を、中国「五千年」の民族史＝国史の基本構造としたのである。この学説は、十九世紀末から二十世紀初めにかけて、清末の漢族知識人による政治運動が活発化する中、国家構想をめぐる議論の前提として、彼らを媒介に中国国内に広く流布することになった。通説として広く中国社会に流布した「漢族西来／苗族先住」説は、苗族を含む南方の非漢族社会にも受け入れられ、各地の民族ナショナリズムを鼓舞し、現地に根強い影響を残すことになった。

共産党政権は、ソ連の多民族史観に影響を受けながら、国民党政府当局の一元的な中華民族史観との対立を鮮明にし、民族抗争と融合を基軸とする多民族史としての中華民族史観を創出、一九五〇年代以後、今日につながる多民族史観へとさらなる発展を遂げた。その中で、「苗族先住」説は、蚩尤始祖説と結び付いたまま、中国多民族史観を構成する民族史学説の一つ、もしくは現地苗族社会に流布する俗説として、根強く継承されて今日に至っているのである。⁽⁴⁰⁾

王朝文らの涿鹿訪問には、苗族としてのこのような歴史意識が背景にあった。特に彼ら貴州の苗族エリートたちは、一九八八年に「苗族の志士および苗族の社会経済文化の発展に関心を持つ各界各族の人士を団結させ、積極的に科学研究を展開、学術交流を進め、民族団結を強化し、苗族地域の政治経済文化の発展と繁栄を促す」ことを掲げて「貴州苗族研究会」を発足させ、組織的活動や学会の開催など、苗族エリートの横断的な連携の下、活発な動きを展開さ



写真 10 「老紅軍」陳靖

せていた。^⑪ 王朝文らの涿鹿行は、そうした背景の下で、起こるべくして起こった出来事だったのである。

(2)「老紅軍」の主張——解放軍幹部の陳靖

苗族エリートと涿鹿との関係をめぐって、もう一人の注目すべき人物は陳靖である【写真10】。彼は、貴州省中部の甕安県草塘出身の苗族で、一九三四年九月に紅軍が貴州に入るとそれに参加（第六軍団〔軍団長…蕭克、政治委員…王震〕所属）、長征途上および抗日戦争下で紅軍および八路軍の文芸・宣伝工作に従事、国共内戦では部隊政治部主任として石家荘・太原・北平（現北京）・天津戦役に従軍、一九四九年以後は人民解放軍の部隊政治部主任・司令員を務めるとともに、軍籍文芸作家として主に戦史に関する文芸作品を多く発表、晩年には南京軍区砲兵司令部顧問などの地位にあった人物である。甕安県東南部出身の陳靖は、言語的には前述の王朝文ら貴州東南部出身の苗族エリートたちと同じ集団に属すと見られる。^⑫

苗族エリートとしての陳靖の活動、とりわけ蚩尤顕彰をめぐる活発な動きについては、彼が一九九〇年代半ばに涿鹿県や国家中央に向け、蚩尤を炎帝・黄帝と並ぶ中華民族の始祖として認めるよう、蚩尤「名譽回復」の請願運動を個人レベルで展開し、内外の支持を得るに至った経緯が、すでに揚志強氏の先行研究で注目され、幾つかの関連史料と共に検討されている。^⑬

しかしながら、楊氏の検討から漏れた関連史料や、近年になり新たに公表された史料は少なくなく、史料のより丁寧な考証が必要となっている。また、前章までの

「涿鹿」の歴史は誰のものか

議論を踏まえるなら、先行研究が専ら注目する苗族エリート側の論理だけでなく、涿鹿県およびその周囲における諸々の展開も考慮に入れ、この問題について多角的に考察をする必要がある。以下、それを試みていきたい。

陳靖と涿鹿・北京

楊志強氏が挙げた関連史料の中で、陳靖が蚩尤問題に関与した最も早い時期の史料として紹介されるのは、涿鹿県政府の指導者に宛てた、以下の書簡内容である。

ここ四、五年、ある人々とある指導者が目先の一時的な需要に氣をとられ、孤立的に、一方的に起こした所謂「炎黃ブーム」は、その他五十あまりの少数民族を軽視し、無意識に民族間の不和を醸成しています。少なくとも十余りの少数民族の中で、「離心」が生じつつあります。我々は彼らの中、下層（少数の上層も）の中において、しばしば「我々は炎黃子孫ではない」「そのような炎黃ブームを煽る人が、何を考えているのか分からない……」という言葉葉を耳にします。ある民族の責任者は、すでに中央部門、さらには中央指導者に対して直接意見具申しているそうです。（陳靖同志給涿鹿県領導写的信）⁽⁴⁾

楊氏が出典として示すインターネットサイトは今日閲覧できない状態になっており、ここに再引用した部分以外、原文全体は筆者未見である。

楊氏はこの書簡の受け取り手・具体的日付について議論していないが、それが涿鹿県政府の指導者に宛てたもので

あることを前章での議論と重ねるなら、まずその具体的な受け取り手として想定されるのは、中共県委副書記の任昌華である。^④時期についても、「炎黄」が問題視されている点から見て、一九九三年四月の「公祭軒轅黃帝大会」から一九九四年四月の周潁南の涿鹿訪問と黃帝祠再建の起工式、および翌五月の国家旅游局での「中華始祖文化村」構想の発表に至る一連の出来事を前提としたものであることは疑いない。そして以下の史料は、その下限が一九九四年十一月であることを暗示する。

この手紙は主として一つの提案、すなわち苗族始祖の蚩尤の名誉回復のため、ご多忙中ではありましようが、出来る支援をして欲しいというお願いをするものです。この十年来、私は「長征の道の再訪」という使命とあわせ、この問題について多くの調査研究を進め、湖南・貴州・四川・雲南・広西および海南省の苗族が暮らす山村、および苗族家庭を訪問し、幾つかの県の地方志・歴史書および各方面の史料を読み、また何人かの地元の知識人や、海外の学者、少数民族の作家に教えを求めました。多くの人は、これは筋の通ったことで、本来ならすでに実現していなければならないのにまだ実現しておらず、もし急ぎ決着をつけなければ後世に遺憾を残すことになるうと思っています。中華人民共和国の成立後、マルクス主義の光輝の下、歴史的に歪曲されてきた多くの人々、例えば「拳匪」・「洪逆」や「闖賊」はみな相次いで本来の姿を回復されました（「名誉回復されました」。なぜかは分かりませんが、蚩尤はいつも「別扱い」の憂き目を見えています。歴史的に最も我慢強い我々苗族もまた、はつきりと強く自分の祖先のことを問題にはしませんでした。しかし「私が「長征の道の再訪」で出会った山深い森の中に暮らす苗族の古老たちは、五千年來の苗族の波乱万丈の歴史を何日にも渡って話してくれました。

「涿鹿」の歴史は誰のものか

彼ら苗族古老の語り伝える歴史だけでなく、数千年来書き継がれた文字の歴史もまた、苗族の祖先が文化的に悠久で、歴史の古い民族であると認めています。……数千年來書き継がれた多くの歴史書のほとんどが、蚩尤と黃帝・炎帝が「対等」の三人で、三大部族の三人の代表であると認めています。もともと黃河中上流域に暮らしていた炎帝と黃帝が、黃河中下流域に暮らしていた蚩尤と同じく、中華文化を共に築いた第一代の祖先であることは、ほとんど全ての「国史」が否定しないものです。……これによつて明らかなのは、中華民族が分割できない、離れられない客観的存在であるということです。しかしながら、この三、四年、一部の人たちは問題を孤立的に偏つて捉え、ただ目の前の特定の必要性だけに注目し、「炎黃熱^{アム}」を引き起こしました。これは無意識のうちに、中華民族の「大家庭」に不和の種を播いたのです。この三年で少なくとも二十人ほどの少数民族同胞が、公開の場で「我々は炎黃子孫ではない」と発言しました。しかし、彼らは「炎帝・黃帝・蚩尤」が中華民族の三人の最も古い祖先であるという観点は受け入れます。……迫り来る二十一世紀を前にして、もし我々が中華民族の大家庭の「三兄」を一堂に会し、団欒を実現させることができれば、それは全国、全中華民族、全世界にとつて、大きな建設的意義のある、すばらしい出来事となりましょう。（「陳靖將軍致胡繩同志的信」⁽⁴⁶⁾）

本史料は二つの異なる出版物に収録されている同一内容の文面だが、一方は原文末に「一九九四・十一月于五指山中」の記述があるのに対し、他方には原文末に「一九九三年十一月」とあり、時期が一致しない。しかしながら、原文中には「上月中下旬、我参加一個「國際苗族文化研究會」（國務院批准、在湖南吉首市舉行）」という文言が別に見える。該当する出来事は一九九四年十月十六く十九日に吉首で開催された「中国湖南湘西州國際苗族文化研討會暨經

済貿易協作会」以外にない。⁽⁴⁷⁾この書簡の時期としては「一九九四・十一月于五指山中」という記述の方を採用したい。それはすなわち、王朝文ら在京の苗族エリートたちによる蚩尤史跡調査行の翌月に他ならないのである。

中国哲学・歴史家の胡繩は、一九八五年～一九九八年にかけて、国家アカデミーである中国社会科学院院長の要職にあった。⁽⁴⁸⁾陳靖は、中央指導者と縁故のある「老紅軍」として、南京軍区の要職身分をもって、国家中央に苗族の声を届けようとしたのである。

以上の史料考証によれば、涿鹿県レベルで黄帝祠再建、中華始祖文化村構想が打ち出されて半年後、王朝文ら苗族エリートたちが蚩尤寨を訪問し、現地幹部と話し合いをした翌月に、陳靖が五指山（海南島）から北京の中国社会科学院に、苗族の立場で、蚩尤を「名誉回復」し、黄帝・炎帝・蚩尤を中華民族の三祖とするよう、申し入れたことが分かる。先に見た陳靖による現地涿鹿県への申し入れは、遅くともこの一九九四年十一月以前と見るのが妥当であろう。

この問題について考える上で、次いで注目されるのが、一九九五年一月に、国家指導者の一人である中国人民政治協商会議主席の李瑞環に対し、陳靖が南京から申し入れを行なったことを示す以下の史料である。

私は苗族出身の老紅軍で、退職後は長征の歴史と民族問題について研究をしています。この十年来、何度も長征の道を繰り返し訪れ、その行程は十万里余りです。繰り返し調査する中で、百万字の文章を書いた他、関係する部署や指導者に……口頭あるいは書面での報告を何度も行ないました。……この度、李（瑞環）主席に手紙を書きましたが、その中心となるのは、苗族の最高祖先である蚩尤のために名誉回復するという提案について述べ

「涿鹿」の歴史は誰のものか

ることです。蚩尤の末裔である苗族は、悠久な歴史を持ち、特徴がある古い民族です。……三年前、一部の漢族たちが、中華民族文化を弘揚し、国内外の中華民族同胞を團結させるために、「中華」民族の大家族の中で最も早く生まれた兄である炎帝・黄帝のために記念像を作ろうとしました。これは本来なら非常に良い願望であります。が、配慮が不十分で、特に正統思想を脱することができず、実際には民族間の不和の種を播くというマイナスの役割を果たし、民族〔間〕の心を離れさせる力を生み出しました。ある人が善後策を提出し、蚩尤を解放して、「炎帝・黄帝・蚩尤」の三兄を並列して示すことを提案しましたが、それはマルクス主義の民族観に符合するのみならず、同時に兄貴分である漢族の度量と心を体现するもので、さらには中華民族の大家族の歴史的形成とも完全に符合します。しかし「炎黄顕彰の」実務を担う人々は同意せず、黄河の岸に超世界級の炎黄巨像を建てようとしただけでなく、数千年来一致して公認され一貫してきた黄帝・炎帝・蚩尤の「三部族」説を「二大部族」にしようとし、さらに兄弟が共に辛い思いをした太古の大戦争を顕彰するために、蚩尤を打ち破って苗族を駆逐して南下させた涿鹿の大地に「炎黄城」を建設しようとさえしました。幸いにも涿鹿県の党政府の指導者たちはそれを受け入れず、中華民族の大家族の團結に役立つ、蚩尤を含めた「中華民族大團結遺址」を建設することを決定しました。涿鹿県の指導者たちのこの決定は、見識があり、事実在即して真理を追究したものであると、私は思います。……皆それぞれ見解がありますが、以下の事実は誰も抹殺できないことです。すなわち、蚩尤と黄帝・炎帝とは対等で、黄河流域に鼎立し、中華文化を作りだした三人の先人で、中華民族の大家族の中の三兄である、ということ。〔陳靖同志就「蚩尤問題」給全国政協主席李瑞環同志写的信〕⁽¹⁹⁾

論旨は前掲の「陳靖同志給涿鹿県領導写的信」「陳靖將軍致胡繩同志的信」と一致するが、本文におけるここまでの議論と関係する注目すべき文言も見出される。すなわち、「涿鹿の大地に「炎黃城」を建設しようしました。幸いにも涿鹿県の党政府の指導者たちはそれを受け入れず、中華民族の大家族の団結に役立つ、蚩尤を含めた「中華民族大団結遺址」を建設することを決定」したという部分である。

これは、先に見たように、涿鹿県政府が一九九四年四月に周穎南の寄付を受けて「黃帝城旅游開發区」で黃帝祠再建の起工式を行なったものの、翌五月には国家旅游局で「中華始祖文化村」構想を発表、やがて三祖顯彰が掲げられるに至った、という事実を指すものであろう。陳靖がそれを高く評価しているのは、彼の涿鹿県への申し入れ、すなわち「陳靖同志給涿鹿県領導写的信」がその重要な契機であったことを暗示する。

陳靖の主張に対するその後の展開

涿鹿の三祖顯彰が任昌華や李庚の「専売特許」でなかったことは、その後の経過からもうかがえる。

一九九五年春、中国社会科学院民族研究所が、陳靖に対して回答したことを示す以下の史料が存在し、申し入れを受けた胡繩と李瑞環が、国家アカデミーの研究所に検討を委ねたことが分かるのである。

この手紙〔「陳靖同志就「蚩尤問題」給全國政協主席李瑞環同志写的信」〕の中心となる考えとは、苗族の最高祖先である蚩尤のために名譽回復するという提案について述べることである。……我々〔民族研究所〕が考えるに、手紙の中で述べられている主要な内容と基本的な観点は歴史的事実と符合し、學術的根拠がある。……蚩尤

「涿鹿」の歴史は誰のものか

は苗族の祖先であるだけでなく、彼は黄帝・炎帝と同じく中華民族の初期の歴史における三人の著名な始祖である。……炎帝・黄帝・蚩尤三人の首領は、今日の中国の全ての民族の祖先ではないが、彼らは最も古く、明確で代表性を備え、関係が密接で対等な、三位一体的な始祖体系である。ただ炎帝と黄帝だけが中華民族の始祖を代表し得るのではない。漢族が黄帝を崇敬するからには、苗族人民が蚩尤を民族の始祖として崇敬し、〔党〕中央と国家の認可を求めるのは、情と理にかなっており、また首肯すべきことである。このことは、苗族の経済文化の発展と民族精神の奮起を助けるものである。伝統的に形作られてきた蚩尤についての不正確な認識と差別的な見方は、国家は力を尽くして消し去り、蚩尤の本来の面目を取り戻すべきであり、中華民族の始祖としてのイメージをうち立て、わが中華民族の団結と進歩を促すべきである。（関于陳靖同志致李瑞環主席的信及苗族問題の意見報告⁵⁰）

こうして陳靖の申し入れは功を奏し、陳情に対する国家からの承認を獲得した。蚩尤を「名誉回復」し、黄帝・炎帝・蚩尤を中華民族の三祖とするという陳靖の宿願は、国家アカデミーを介して、国家中央による「お墨付き」を得るに至ったのである。

一九九五年九月に涿鹿で、李学勤ら中国社会科学院の研究者らを迎えて「全国首届涿鹿炎黄蚩三祖文化學術研討会」が開催されたが、その前提にはこのような国家中央からの承認があったのである。そしてこれこそが、涿鹿県が黄帝祠再建ではなく中華三祖堂建設に舵を切り、やがて中華合符壇の出現を導くに至る、最大の契機であったと考えられる。涿鹿のモニュメントや関連施設の形成、三祖顕彰という動きについては、前章で検討した任昌華と同等に、この

陳靖の役割を忘れることはできないのである。

一方で、「涿鹿の代弁者」李庚の存在、またそれと結び付く中央政界の王朝文らの、北京を舞台とした苗族エリートのネットワークの存在も、以上の議論で明らかとなった。すなわち、涿鹿のモニュメントや関連施設の形成、三祖顕彰という動きは、一人の地方幹部の地元振興にかける野心や、一人の軍幹部の民族復権にかける情熱だけによるものではない。漢族／非漢族、涿鹿／貴州という単純な対立構造ではなく、涿鹿の歴史をめぐる多様な関心の存在と、後に機能する複雑なネットワークの構造に目を向け、それを理解する視点が重要である。

三、「炎黄」顕彰をめぐる諸問題——「中華炎黄文化研究会」を中心に

こうした認識に立つて、まず考えるべき問題は、なぜこの時期に蚩尤顕彰と黄帝・炎帝・蚩尤を中華民族の三祖とする主張が、軌を一にして出現したのかという点である。

三者の主張の具体的関係性については、任昌華と李庚の間と同様、陳靖を含めた三者間でも、それぞれが主張の中で他者の主張に触れておらず、明確な答えを示すことはできない。しかしそれらがともに、一九九四年の春から冬にかけて、涿鹿県で黄帝顕彰の機運が盛り上がる中、異なる思惑をもって、それぞれに新機軸を模索した結果であったという理解は可能である。

その時代背景を推測する手掛かりとなるのは、前章で紹介した「陳靖同志就「蚩尤問題」給全国政協主席李瑞環同志写的信」（一九九五年一月）の中の注目すべき記述である。陳靖は、自らが蚩尤の「名誉回復」を主張するに至った

「涿鹿」の歴史は誰のものか

背景として、「三年前、一部の漢族たちが、中華民族文化を弘揚し、国内外の中華民族同胞を團結させるために、「中華」民族の大家族の中で最も早く生まれた兄である炎帝・黄帝のために記念像を作ろうとしました。……ある人が善後策を提出し、蚩尤を解放して、「炎帝・黄帝・蚩尤」の三兄を並列して示すことを提案しましたが、……〔炎黄顕彰の〕実務を担う人々は同意せず、黄河の岸に超世界級の炎黄巨像を建てようとしただけでなく、数千年来一致して公認され一貫してきた黄帝・炎帝・蚩尤の「三部族」説を「二大部族」にしようとし」たことに言及する。それが一九九一年に党中央の元老たちを中心に発足した「中華炎黄文化研究会」の動向を意味するのは、以下の検討に見るように、疑いのない点である。

中華炎黄文化研究会については、その定期刊行物である『炎黄春秋』が当局の介入によって突然刊行を停止したという最近の報道でも脚光を浴びたが、それ以前から、中共主流派の言論や「中華ナショナリズム」の展開に関心を寄せる複数の研究者によって注目され、また前章での議論と同様「苗族ナショナリズム」に関心を寄せる研究者によっても、陳靖ら苗族エリートたちの蚩尤顕彰運動との関連から検討が試みられてきた。⁽⁵²⁾

しかし、これらの先行研究で分析対象とされていない史料も少なくない。また同研究会には当初から発揚すべき中華ナショナリズムをめぐる内部に多様な意見が存在し、加えて同研究会の発足自体が実は一九八〇年代末以来の歴史を持つものであったことは、先行研究によって全く見落とされている論点である。

前章までの議論を踏まえつつ、涿鹿そのものの問題からは一旦離れ、中華炎黄文化研究会を焦点として、三祖顕彰が生まれた時代背景について、より広い視野から検討を試みたい。

(1) 問題の所在

中華炎黄文化研究会の成立

中華炎黄文化研究会は、一九九一年五月十日、湖南出身の歴史学者周谷城を会長、湖南出身の人民解放軍元老の蕭克を執行会長として、北京の人民大会堂で成立した。成立大会時に理事会で決定された「中華炎黄文化研究会章程（一九九一年五月十日）」には、以下のようにある。

第一条 名称…本団体は中華炎黄文化研究会と名を定める（英訳名は Association for Yan Huang Culture とする）。

第二条 性質…本会は全国的な文化団体で、社団法人である。中華を愛し、炎黄文化を熱心に研究・弘揚する、海内・海外の専門家・学者と各界の人士によって組織される。

第三条 宗旨…本会の宗旨は、中華民族の優秀な文化を弘揚し、民族精神を振興し、祖国の現代化建設と統一の大事業のために貢献することである。

第四条 任務…一、炎黄文化の史料を収集・整理し、中国伝統文化を研究・検討し、中華民族の優秀な文化を弘揚する図書・雑誌を編纂・出版する。

二、中国鄭州の黄河遊覽区に中華民族を象徴し、炎黄子孫の感情を凝集する炎黄二帝巨型塑像を建設する。

三、海内・海外の炎黄子孫を連携し、文化の交流を促進し、民族の団結を強め、祖国の統一を推

「涿鹿」の歴史は誰のものか

進する各種活動を展開する。

〔以下省略〕⁽⁵³⁾

ここに読み取れるのは、「中華民族」すなわち「炎黄子孫」という基本認識である。

反応——中国ムスリムの場合

成立大会に参加した中共元老の一人、中共中央顧問委員会副主任の薄一波（中華炎黄文化研究会名誉会長）による祝辞に、以下の内容がある。

炎〔帝〕黄〔帝〕の二帝は伝説時代の英雄人物、太古の二大部族の領袖で、その活動地域は主に黄河中流域、すなわち中原地域で、今日の中国の領域と比較すれば、限られた範囲でしかない。ある人は、炎黄の子孫だけでなく、さらに蚩尤の子孫、九黎の後代なども今日の中国人の中にいると言う。これらの説も間違いではないが、様々な歴史的理由で、歴代口伝され、炎黄はすでに中華民族の象徴となっている。炎黄と言えば、専門家以外でも、人々は通常その民族帰属や地域にこだわることなく、ただ我々中華民族全体の五千年の文明の歴史、九百六十万平方キロメートルの山河と大地を想起する。思うに、まさにこのため、中華民族文化を弘揚させることを目的としたこの学会は「中華炎黄文化研究会」と命名されたのである。（「中顧委副主任薄一波同志在中華炎黄文化研究会成立大会上的講話」⁽⁵⁴⁾）

ここに見るように、同研究会は、「中華民族文化」の「弘揚」、すなわちそれを広め発展させることを目的として発足した。ただし、その会称については、中華民族全体の代名詞として「炎黄」が最もふさわしいと判断したが、当時、一部に異論にあったことも示唆している。

「ある人」が言ったとされるものが、具体的にいかなる出来事を指すのかは明らかでない。挙げられているのが「蚩尤の子孫、九黎の後代など」であるため、前章で見た陳靖に代表される苗族エリートたちの主張だけを想起しがちだが、事実はそれほど単純ではない。

中華炎黄文化研究会が、成立の翌年、一九九二年五月到北京で開催した「炎黄文化与中华民族」學術討論会は、標題通りの「炎黄Ⅱ中華ナシヨナリズム」の発揚を主旨とする多彩な発表が集まった学会であった。しかし、一部の会員による報告には例外も見られた。同研究会の副会長で山東省出身の回族、元寧夏回族自治区主席で、この当時は全国政治協商會議常務委員であった黒伯理が、以下の内容の注目すべき発言を行なっている。

私は四つの意見を述べたい。第一に、炎〔帝〕黄〔帝〕は中華民族の共通の旗印と象徴だということである。

炎黄が回族の祖先であると言うことに同意しないが、炎黄が我々中華各民族共通の旗印、声であると言うことは大いに賛成である。それで私は、我らの〔中華〕炎黄文化研究会に対し、各少数民族を團結させるために、この〔炎黄〕概念を〔より広い機会に〕頻繁に用いるべきだと提案したい。なぜなら、私が知るところでは、炎黄文化研究会は漢族文化が対象で、漢族の宣伝だと言う人がいるし、大漢民族主義だと言う人さえいる。これはもちろん過激な言葉だが、炎黄が我々中華民族の共通の象徴だと頻繁に言うことによって、炎黄文化研究会の声を

「涿鹿」の歴史は誰のものか

高め、中華民族の凝集力を強める必要があることを、我々に思い知らせてくれるものでもある。第二に、炎黄文化は〔非漢族を含めた〕各民族が共に創り出したものだということである。事実もその通りである。……少数民族の炎黄文化に対する貢献を出来るだけ反映させるということについては、〔中華炎黄文化研究会主宰の雑誌〕『炎黄春秋』は注意してこの方面の文章を組む必要がある。各少数民族の中でも、回族は非常に多くの貢献があると言うことが出来る。……イスラム教の民族は、それ自身の文化もまた炎黄文化の構成要素であり、したがって、炎黄文化は各民族が共に創り出し、互いに影響を与え合ったものである。この点を、我々は今後より注意して宣伝しなければならない。第三に、蚩尤に一定の地位を与え、『炎黄春秋』は〔それを〕反映すべきだということである。私は蚩尤について研究したことがないが、蚩尤は一人の領袖、軍事的指導者であり、中国の歴史において一定の地位を与えるべきだと考える。蚩尤は単に苗族や黎族だけを代表する者ではなく、彼に対する宣伝は同時に少数民族〔全体〕に影響がある。……私は山東臨清市出身だが、私の故郷には……「沙丘古渡」……があり、黄帝はここから黄河を渡って蚩尤と戦い、黄河の北に向かった。蚩尤という人物に対しては、適切に宣伝して、文章を発表し、我々の刊行物に繰り返し取り上げ、研究をすることが、少数民族を団結させる上で利となるのである。（黒伯理「我的四点意見」⁽³⁵⁾）

黒伯理が問題提起したのは、今日の中国が多民族国家であることを考慮し、同研究会が「炎黄」顕彰を推進するにあたっては、少数民族の立場を汲み入れ、「炎黄」は（現実の始祖ではなく）個々の民族を超越したシンボルで、「炎黄文化」は全民族共通の遺産に他ならないと定義すべきだ、という点である。そして、後者の問題について、自らの

回族の事例を列挙して論じ、次いでこの問題の象徴的事例として、蚩尤を取り上げているのである。黒伯理の回族の立場と蚩尤の問題は、「始祖」論的には全く無関係であるが、それに言及したのは、おそらく故郷山東と蚩尤との関係性においてであろう。

本論文は涿鹿を主題として分析をするものであり、他地域の問題についてはここで論じる余裕がない。蚩尤伝承には複数の系譜があり、その一つが東夷の領袖としての蚩尤論で、山東には蚩尤の墓など関連伝承地も存在し、涿鹿と同様、地元レベルでの蚩尤顕彰の動きも認められるという点のみ、紹介しておくにとどめる。⁽⁵⁶⁾

すなわち、黒伯理は回族の立場を代弁しつつ、山東人として蚩尤を引き合いに出し、あわせて多民族国家としての配慮を訴えたのである。その主張は、列席した他の発言者の関心を引き、大いに賛同を得た様子である。⁽⁵⁷⁾時系列的には前後するが、前に挙げた薄一波による祝辞での「蚩尤子孫」への言及には、一般に想定される苗族エリートの主張以外に、このような全く別の思惑を持つ非漢族の論者の意見も反映されていたと理解すべきであろう。

三祖顕彰が出現する背景の複雑さを示す事例であり、この時期の涿鹿以外の「炎黄」顕彰をめぐる諸動向と、苗族以外の非漢族を含めた反響について、より広い視野で検討する必要がある。

中共中央要人の役割——李瑞環の場合

一九九一年の同研究会成立大会には、上述した薄一波に加え、中共中央政治局常務委員の李瑞環も参加し、「中華炎黃文化はすなわち中華民族文化とも言える」と、祝辞で述べている。⁽⁵⁸⁾

翌一九九二年十月、北京の人民大会堂で「黃帝陵基金会」成立大会が開催された際にも、同基金会名誉会長として

「涿鹿」の歴史は誰のものか



写真 11 「黄帝陵」公祭（1994年4月・陝西省
黄陵县、中央が李瑞環）

薄一波・蕭克が出席しただけでなく、李瑞環が祝辞を寄せ、「黄帝は我々民族の人文始祖であり、黄帝陵は中華民族の子孫が共に崇拝する聖地である」と伝えた⁵⁹とされる。

ここと言う黄帝陵とは、陝西省黄陵县に存在する伝承地のことである。李瑞環は、一九九四年四月に現地で清明節に開催された「公祭」に参加し【写真11】、地元から黄帝陵の全面的修築について報告を受けた際、それに対する中央政府の支持を明言して、それ以後、毎年、国家指導者が「公祭」に参加するようになったという⁶⁰。

前章で、一九九五年一月に陳靖が李瑞環に陳情し、蚩尤の「名誉回復」を訴えたことを確認したが、それは単に国家指導者の一人としての李瑞環の地位がそうさせたというよりも、彼が党中央の現役の要人の中で、最も「炎黄」顕彰に熱心で、なおかつ政協主席としてその職責を担う人物だったからなのである。

中共中央の要人が、同研究会の活動と「炎黄」顕彰にいかに関与していたのか、改めて検討してみる必要がある。

(2) 「炎黄二帝」塑像建設の時代——「炎黄子孫」論をめぐる緊張関係 「炎黄二帝巨型塑像（巨塑）」問題

以上二つの問題に関連して、「章程」中の奇妙な一文が注目される。「中華」「海内外」レベルの構想と並んで、河南省の「鄭州黄河遊覧区」に「炎黄二帝巨型塑像」を建てるという、一地方に特化した条項が設けられている点である。

成立大会での、同研究会執行会長蕭克の講話にも、当面の目標としてこの建設構想が明示されている⁽⁶⁾。その関係性については研究会成立の前史にさかのぼって検討してみることが必要である。

地方振興構想としての当初計画

現在、黄河中流域の代表的観光地である河南省鄭州市の「黄河遊覧区」には、炎帝と黄帝の巨大な頭部が黄河南岸の丘の上に構築され、高さ一〇六メートルの「炎黄二帝巨塑」（一九九一年九月定礎、一九九四年九月起工、二〇〇七年四月竣工）として威容を見せている【写真12】。これが中華炎黄文化研究会による、成立時の計画に沿った成果なのである。

「炎黄二帝巨塑」が建つ鄭州市郊外の黄河の河畔には、もともと水利施設があったに過ぎなかった【写真13】。ところが、一九七九年に王仁民という一人の中共地方幹部は、中共支部書記兼浄水場長に着任するや、その地を観光開発する計画を鄭州市に働きかけ、その結果、一九八一年に「邙山風景区」、次いで「鄭州市黄河遊覧区」として公認を得るに至り、以後、開発を推進する。遊覧区内に歴史的塑像を建てる事業は、上代の黄河治水伝説で名高い「禹」（夏王朝創業者）を象った十メートル余りの「大禹彫塑」を一九八〇年代前半に実現させたのが、最初の事例である。

一九八〇年代後半、遊覧区の観光開発が行き詰まりを見せ始めた時、王仁民が新たに打ち出したのが「炎黄二帝巨塑」構想であった。一九八七年春に「炎黄二帝」の像を遊覧区内に建てる着想を偶然得た王仁民は、鄭州市の支持下、同年十月には記者発表を行なった。やがて、それは全国的反響を呼び、それを受けて、まずは市レベルで「炎黄二帝巨型塑籌建委員会」が立ち上げられ、やがて一九八八年には新任の副省長劉源の下で、河南省の支持を得て省



写真13 「炎黄二帝巨塑」定礎式
(1991年9月・鄭州市黄河遊覧区、石
碑左は蕭克、右が王仁民)



写真12 「炎黄二帝巨塑」竣工式
(2007年4月・河南省鄭州市)

レベルの組織に昇格し、「河南省炎黄二帝巨型塑像籌建委員会」の成立を見たのである。⁽⁶²⁾ 王仁民の熱意はとどまることを知らなかった。一九八八年八月から十二月にかけて、彼ら河南省の一行は北京で当該事業の支持を求める陳情活動を展開する。そして、一九八八年十二月二日、北京の中共中央辦公庁老幹部局會議室において、中共元老たちによる座談会が王仁民を交えて開催され、ついに周谷城を会長、蕭克を第一副会長として「炎黄二帝巨型塑像籌建委員会」が成立したのである【写真14】。その後、この「炎黄二帝巨型塑像籌建委員会」は一九九〇年一月に総会で「炎黄文化研究会」と改称、さらに「中華炎黄文化研究会」名義で同年六月に中国政府文化部から社会団体として成立の同意を受け、八月には民政部から批准・登記（發起人登記：王仁民・劉源・蕭克）を得て、先に見たように、翌一九九一年五月、同研究会は正式に成立大会を開催するに至ったのである【写真15】。

同研究会の成立にともない、「炎黄二帝巨型塑像籌建委員会」はその下部組織となつて事業を推進し、一九九一年九月に定礎式が挙行される。⁽⁶³⁾ しかしながら、資金難などの各種障害のため、実際に工事が始動したのは一九九四年九月、竣工式が行なわれたのは二〇〇七年四月で、⁽⁶⁴⁾ 事業には多くの困難がつきまとつたのである。



写真 14 「炎黄二帝巨型塑像筹建委员会」成立大会（1988 年 12 月・北京、前列中央が蕭克、後列左から三人目が王仁民）

地方振興の資金集めから「統一戦線」工作・「中華文化」発揚へ

このように、一人の中共基層組織の幹部による観光地開発の野望が、「改革開放」経済の進展の中で、まずは鄭州市、次いで河南省と、地方レベルの地域振興のプロジェクトとして昇格し、各界の反響を後押しに、ついには中共中央の元老たちの支持を獲得し、全国レベルの活動へと発展するに至った経過が見て取れる。

地方レベルの構想が、なぜこのように短期間で中共元老たちの支持を集めることができたのだろうか。その展開を母体組織の性質の変化という点から検討してみよう。

先に「中華炎黄文化研究会章程（一九九一年五月十日）」の内容を確認したが、その母体である炎黄二帝巨型塑像筹建委员会⁽⁶⁾の「炎黄二帝巨型塑像筹建委员会章程（一九八八年十二月二日）」を見ると、

- 一、本会の宗旨は中華文化を弘揚し、海内・海外の炎黄子孫を広く連携・団結し、民族の自尊・自信・自強と団結統一の精神を強め、改革開放と海内・海外の文化交流を促進し、祖国統一の大事業を推進し、世界平和を維持することである。
- 二、集め得た資金は、鄭州の黄河遊覧区に建設の、中華民族を象徴する炎黄二帝巨型塑像および巨塑内に設けられる十大文化展示室に全て用いる。
- 三、資金は主に、中華文化に熱心な海内・海外の炎黄子孫と、友好平和に尽力

「涿鹿」の歴史は誰のものか



写真 15 「中華炎黃文化研究会」成立大会
(1991年5月・北京、右から蕭克・李瑞環・薄一波)

する海外の友人および関係団体の寄付に由来し、国家には金銭を求めない。
〔以下省略⁽⁶⁶⁾〕

とあって、二つの「章程」の間で顕著な違いが認められる。籌建委員会は、あくまでも鄭州の「炎黃」像の建設のための資金集めのみを目的に、「海内外」に広く訴えるための組織であり、「中華文化」の発揚や「炎黃子孫」意識の呼び起こしは、そのための手段に過ぎなかったのである。

では、そこからわずか三年で、いかにして「中華炎黃文化」の発揚を主目的とする組織へと転換したのだろうか。

前述の通り、同委員会は一九九〇年六月から八月にかけて、公認団体として中国政府文化部・民政部の批准を得た。これに先立って、その申請のために用意された「中華炎黃文化研究会章程（一九九〇年五月二六日）」には、上記二つの章程の過渡段階に位置付けられると見られる。以下の内容が見られ、注目に値する。

第一条 名称：中華炎黃文化研究会、英訳名は The Ancient Chinese Yan and Huang Culture Research Association、略称はACYH CRAとする。

第二条 性質：全国的な學術研究団体で、社團法人である。炎黃文化研究に熱心な海内・海外の専門家・学者・

各界知名人によって組織される。

第三条 宗旨…炎黃文化の中華民族の形成・発展・繁栄に対する役割と人類文明に対する貢献を研究する。中華

民族の優秀な伝統を継承し、中華民族の自尊・自強・自信と団結統一の精神を強める。中国の物質文明と精神文明の建設を促進し、四つの現代化事業を推進し、人類文明のために貢献する。

第四条 任務…一、各種のルートを通じて、政治・科学技術・経済・軍事・民族など炎黃文化の史料を収集・整理・研究・精選する。炎黃文化の科学的先進性や、〔それが〕中華民族文化へと発展することの

必然性を論証する。

二、炎黃文化の研究を通じて、中華民族の優秀な伝統に対する認識を深め、中華民族文化を弘揚し、民族精神を振興する。

三、中国鄭州の黄河遊覽区に中華民族を象徴し、民族の感情を凝集する炎黃二帝巨型塑像と巨塑内の十大文化展示室を建設する。

四、海内・海外の炎黃子孫を広く連携し、海内・海外の科学技術・文化の交流を展開、各民族の団結を強め、祖国統一の大事業を推進する。

〔以下省略〕⁽⁶⁷⁾

一貫するのは、中華文化を広め発揚し、改革開放政策を支え、統一事業を推進するという目標である。三者に共通して「国内外」ではなく「海内外」という文言が用いられていることから、それが（海峡の向こうの台湾を含めた）

「涿鹿」の歴史は誰のものか

海外華人を主眼とした、中共の伝統的な党外人士の連携（懷柔）工作、すなわち「統一戦線」工作に属するものであったことが明らかである。

一方で、三つの「章程」の時系列的変化を見ると明らかのように、一九八八年から一九九〇年までのある時期、当初の目的であった「炎黄二帝巨塑」構想以外に、活動範囲が明らかに拡大している。資金集めのための団体は、文化研究と文化振興を掲げ、海外との交流を推進して「改革開放」に貢献することを目指す、文化・社会团体となった。当初、「炎黄」はあくまでも建設事業推進のための表看板的に過ぎなかったが、「炎黄文化」という文言の出現に見るように、次第に「海内外」統一戦線の象徴としての意味合いを強めていったのである。

とりわけ、「中華炎黄文化研究会章程（一九九〇年五月二六日）」には目立つ特徴が多い。「炎黄子孫」という文言は三者全てに見られるが、この一九九〇年の「章程」には「中华民族」という文言が特に多く用いられ、また「炎黄文化」によって中国の伝統を肯定することに特に力が入られているという印象を受ける。また、それとは対照的な普遍的価値観である「人類文明」という比較軸の設定は、他の「章程」に例を見ないものである。

一九九〇年の「章程」における「中华民族」という文言の突出は、一九八八年にまとめられ、翌一九八九年に中国国内で発表されて社会の大きな反響を得た、費孝通の中华民族論からの影響が想定されよう。費孝通は「多元」かつ「一体」という「多元一体」の新たな概念によって、今日の中国を構成する国民を中华民族として定義付け、多民族国家として存立する必然性を、先史時代以来の中国独自の歴史的展開に求めた。⁽⁶⁸⁾ 費孝通は、一九八〇年代末までの自らの論著では「炎黄子孫」を用いず「中华民族」だけを用いていた。しかし、一九八八年に周谷城の逝去を承け、中華炎黄文化研究会の新会長（第一会長は蕭克）に就任すると、「炎黄文化」とは、すなわち炎帝・黄帝を象徴とする、多元

一体の中華文化である」と断言するに至っている。⁽⁶⁹⁾一九九〇年の「中華炎黃文化研究会章程」の特徴と一九九一年の成立大会以後の展開は、明らかに中華民族論の隆盛と軌を一にしている。

時代思潮との関係性——「河殤」後の文化保守主義の攻勢

一九八八年到北京で炎黃二帝巨型塑像籌建委員会が成立した契機が、鄭州からの王仁民らの陳情にあったことについては、すでに述べた。しかしながら、それが中共元老たちの賛同を直ちに集めた理由は何であろうか。一九九〇年の「章程」に見られる伝統の肯定と普遍的価値観の基準としての設定に注目し、中華民族論の隆盛以外の時代思潮から、検討してみよう。

先に、苗族エリートの陳靖による蚩尤「名誉回復」と三祖顕彰をめぐる陳情活動について検討した。元紅軍第六軍団「老紅軍」の彼にとつての元上官、元第六軍団長（連隊長）の蕭克は、人民解放軍元老の地位をもつて、炎黃二帝巨型塑像籌建委員会では第一副会長、中華炎黃文化研究会では執行会長の要職にあった人物である。

「炎黃」顕彰を推進する立場にある往年の上官に対し、陳靖は涿鹿県幹部や李瑞環・胡繩と同様、書簡を送つて蚩尤の「名誉回復」を申し入れている。その書簡の中に、「思い出されるのは、全国〔中華〕炎黃研究会が成立した時、一人の人徳・人望ある元老が講話の中で、今日マルクス・レーニン主義の旗はあまり役に立たなくなった、我々には別の旗が必要で、それがつまり炎黃だと述べたことである」という記述が見え、注目に値する。⁽⁷⁰⁾

陳靖は同委員会・研究会の委員・会員ではないが、同じ人民解放軍の組織の中で、「老紅軍」として共に生き、元上官・部下として親密な関係を維持してきた蕭克が、同委員会・研究会の要職にあったことを考慮すれば、この記述は

「涿鹿」の歴史は誰のものか

何らかの情報として陳靖が伝え聞いた、本来の意味を反映するものである可能性が高い。

「人徳・人望ある元老」とは先述の薄一波のことだろう。同研究会成立大会での彼の講話として公表されている内容の一部は、すでに紹介した。それに続く部分には、西洋崇拜主義を「自」民族虚無主義」として批判し、揺らぐことなく中国の特色ある社会主義の建設を進めることを述べた内容が認められ、陳靖の記述と概ね重なる。

そして薄一波の講話と同様に、同成立大会での蕭克の講話には、「歴史を断ち割り、過去を忘れ、祖先を捨てた民族に前途はない。テレビドラマ「河殤」は放映されるや、すぐに批判を受けたが、原因はすなわちそこにある」という、さらに興味深い文言が見える。「河殤」とは、中央電視台(CCTV)で一九八八年六月に全六集四時間にのぼるドキュメンタリー大作として放送(同年八月に再放送)された番組のことである。経済面での「改革開放」のスローガンの下、西洋から普遍的な価値観が一気に流入した中国社会において、一九八〇年代、中国伝統文化／西欧近代文化という対立軸で、一種の「文化(論)熱」^②が起きていた。伝統文化の閉塞感を社会に問いかけ、中国固有の歴史性を否定した「河殤」は、知識人を中心に多大な反響を呼び、間もなく当局による「河殤」批判キャンペーンが展開されるに至った。王仁民らの陳情を受け、蕭克ら元老たちによって炎黄二帝巨型塑像筹建委員会が北京で組織された時期は、まさにこれと一致するのである。

一九八八年十二月二日に北京の中共中央辦公庁で開催された「炎黄二帝巨型塑像筹建委員会在京部分副会長、部分常委座谈会」では、常務委員の馮其庸から、「炎黄二帝巨型塑像」建設の今日的意義を高く評価する理由として、「周知のように、現在は社会に各種の思潮が非常に多く、その中の一つは、伝統文化・歴史に対し、ひいては我々民族にさえ、一種の虚無主義的態度、否定的態度、自分で自分を見下す態度をとっている」という発言があったとされる。^③

また北京以外でも、「炎黄二帝巨型塑像」発案者の王仁民は、当時「河殤」に対抗し、一九八八年十二月に「河輝」という論文を書き上げ、全国各地の主要新聞に送ったとされる。編集部からの返事は「中央の一部指導者の「熱を冷ませ」という指示により、今後この種の文章は掲載しない」というもので、一九八九年の天安門事件（「六四」）以後、ようやく日の目を見ることになる。⁽¹⁴⁾

「八〇年代の啓蒙の時代から、六四の挫折を経て、九〇年代の文化保守の時代へ」と向かう中で、ついには一九九三年、伝統文化の研究を主軸とする「国学」の正統化の動きが、各種メディアで展開されるに至った。⁽¹⁵⁾そして「河殤」に象徴される文明伝統に対する批判を契機として、それに対抗し、孔子と並んで中国社会に改めて位置付けを得たのが「炎黄」だったのである。

鄭州市郊外の黄河遊覧区で王仁民が観光開発の観点から立ち上げた「炎黄二帝」像の構想は、鄭州市、そして河南省レベルに事業構想として昇格を続け、一九八八年十二月に党中央の元老たちの「お墨付き」を得て、全国レベルの事業として実現に向けて動き出した。その背景には、一九八〇年代後半の「文化（論）熱」^{ブーム}に対する、中共元老たちの反撃という側面があったのである。そして「炎黄文化研究会」と改称し、文化・社会团体としての性質を盛り込んだ新たな「章程」が起草された一九九〇年以後、同研究会は、「六四」以後の思想保守化の流れの中で、中華民族論や中華ナショナリズムの高揚、「愛国主義」政策の展開を後押しとして、さらなる発展を遂げていく。しかしそれはまた、新たな矛盾を引き起こすことになるのである。⁽¹⁶⁾

「涿鹿」の歴史は誰のものか

「炎黄二帝巨塑」建設に対する批判の声

鄭州の王仁民は、二〇〇〇年に刊行した著書で、「炎黄二帝巨塑」事業の由来と展開を回顧した上で、目下の二つの困難を述べて結びとし、翻って事業継続への支持を暗に訴えている。困難の一つ目は事業継続の経費不足である。そして、その二つ目に挙げられているのが「炎黄二帝に関する異議」の相次ぐ申し立てである。⁽⁷⁾

前節で述べたような時代思潮や政治的後押しがあったにも関わらず、一九九一年に「炎黄二帝巨塑」定礎式がメディアの脚光を浴びたことが契機となつて、各地から批判の声が上がつたのである。先に見た回族エリートの黒伯理の問題提起もまた、その一つであつた可能性がある。

王仁民は、寄せられた異論について、時系列に沿つて回顧している。少し長くなるが、全く知られていない貴重な記事なので、あえて関係箇所全文を翻訳する。

一九八八年、広西壮族自治区記者協会主席の王笠夫が、壮族の上京参観団を引率して黄河遊覧区に見学に来た。私は彼らを接待して、炎帝・黄帝二帝は中華民族の人文始祖であり、炎黄二帝巨塑を建設すると彼らに話した。聞き終えると、彼は私に「我々広西の壮族は炎黄子孫ではない、壮族の文化は漢族の文化よりもさらに古い」と提起し、さらに「この問題はまた私が改めて来て話そう」と言つた。一九九一年四月、彼は私に手紙を寄こし、炎黄二帝と中華文化という問題について、共に話し合い、意見を交換したいと言つてきた。そして炎黄二帝巨塑の定礎式が報道されると、一九九一年十月にわざわざ広西から鄭州に来て、河南省記者協会副主席の周政氏を帯同し、遊覧区にやつて来たのである。彼は非常に真剣かつ懇切に私に三つの問題を提起し、回答を求めた。一つ

目の問題は炎帝・黄帝の二帝は黄河文化といかなる関係があるか、二つ目の問題は黄河文化と中華文化との関係はまたどうなのか、三つ目は、壮族文化は六千年余りの歴史があるが、漢文化は五千年の歴史で、壮族は漢族よりも古い、壮族は炎黄子孫ではない、というものであった。……

それから間もなくして、北京から一人の老紅軍がやって来た。名は陳靖、『中華炎黄文化研究会副会長・『炎黄春秋』社長』杜導正氏の紹介で私を訪ねて来たのであり、遊覧区に二泊した。彼の話では、彼本人は苗族ではないが、彼の夫人が苗族であるとのことだった。彼はこう言った。あなたが炎黄二帝巨塑を建設するのは民族の團結に害をなす。なぜなら、炎帝・黄帝の二帝は中国の各民族を象徴し得ないからだ。もし「それを」象徴させるのなら、苗族の代表的人物である蚩尤の塑像を炎帝・黄帝の二帝とともに建設しなければならぬ、と。彼はこうも言った。歴史的に炎帝・黄帝と蚩尤は三人の兄弟で、もし像を建てるのなら、みな建てなくてはならない。そうすれば中華民族を象徴することになる、と。当時、彼は非常に気持ちを高ぶらせて話をした。彼はまた言った。イギリスのある歴史学家が、世界的に二つの民族が最も偉大で優れた民族だ、一つがユダヤ民族、もう一つが苗族であり、彼らは世界各地に離散し、大変な苦勞をした、と述べたことがある。苗族の代表的人物である蚩尤は黄帝・炎帝とともに、みな黄河と長江流域で活動した。蚩尤が青銅や稲作を發明したのは大変な功績である。後に炎帝・黄帝と蚩尤は相争い、蚩尤を打ち負かして、蚩尤を野獸のように描写し、蚩尤の末裔は雲南・貴州の山奥に逃げ去った（それが今日の苗族である）。後世の人々の蚩尤の扱いは不公平である、と。……

一九九一年十一月上旬、河南省省長助手の楊光喜が私に電話してきて、「王さん、国家民族事務委員會の第一副主任が河南に来て視察するのだが、彼はあなたに会いたがっており、明日昼をご馳走するから中州賓館に来てく

「涿鹿」の歴史は誰のものか

れ」とのこと。その昼食に参加したのは、河南省人民代表大会副主任の林曉、国家民族事務委員会第一副主任の趙延年〔河南南召人、回族〕と秘書の計四人であつた。面会して挨拶を終えると、彼はこう言つた。「私は今回河南に帰つて来たが、わが故郷〔河南〕の入口に炎黃二帝巨塑を建設するそうだね。それはどういう意味か。それは民族団結に害をなすものだ。その問題をあなたは考えたことがあるか。炎黃子孫という言い方は適當でない。この数年、国の指導者が何度か会見で話をしたが、なおも一部の指導者はその場で炎黃子孫という言い方をした。現在北京で炎黃芸術館がつくられ〔一九九一年九月開館〕、河南でまた炎黃二帝巨塑を建設しようとしているが、これはおそらく民族団結に害をなすだろう。歴史的に大漢民族の象徴である炎帝・黃帝の二帝は、他の民族に対しては侵略、統治、搾取を行なつたのであり、今日また炎帝・黃帝の二帝を持ち出せば、その他の民族の不滿を引き起こすだろう。現在チベットのダライラマは国外で活動を続けており、中国は幾つかに分かれ、チベット・モンゴル・東北はそれぞれ一つの国、真ん中が漢民族の中国に過ぎないなどと言っている。こうした状況下で、あなたが炎黃二帝〔巨塑〕をやろうとしているのは、あつてはならない影響を民族団結に生み出す可能性がある」と。彼の地位は高く、言葉は激しかった。……

一九九四年、河南省文化庁が全国人民代表大会の貴州省代表による炎黃二帝巨塑建設に関する意見を転送してきた。その意見とは、炎帝・黃帝・蚩尤がみな中華民族の祖先であり、炎黃二帝〔巨塑〕建設事業は民族団結に害をなすから、炎帝・黃帝・蚩尤三人の巨大な像を建設すべきである、というものだった。^⑦

すなわち、一九九一年の十月から十一月にかけての時期、中華炎黃文化研究会の幹部の紹介を通じ、王仁民と接触

を図ってきた苗族「老紅軍」の陳靖は、「炎黃二帝巨塑」建設を批判し、蚩尤の「名誉回復」を訴え、炎帝・黃帝と蚩尤の三像をつくるよう申し入れた、と言うのである。主張の内容は前述の涿鹿県や党中央の要人たちに対するものとはほぼ同じだが、時系列としては、一九九四年から一九九五年にかけての時期のそれらよりも約三年前にさかのぼる。そしてその後、一九九四年に、同様な炎帝・黃帝と蚩尤の三像建設を要求する申し入れが、今度は全国人民代表大会の貴州省代表によってなされたことも知るのである。全ては一連のものと理解すべきであろう。その先驅をなしたのが陳靖の「炎黃二帝巨塑」建設批判だったのである。

このように、陳靖ら苗族エリートたちの「蚩尤熱」に最初の火をつけたのは、先に見た一九九四年の涿鹿における「黃帝祠」再建問題ではなく、一九九一年の「炎黃二帝巨塑」建設事業の始動であった。

そしてまた、王仁民の回顧からは、そうした反応がこの当時、苗族エリート以外にも寄せられていたことも明らかとなる。広西壮族自治区のメディア界要人による固執と批判は、苗族と並ぶ代表的な中国南方の非漢族、壮族（チワン族）の意見を反映したものと理解されよう。また上文に見える趙延年の反応は、チベット族などの周辺民族に波及することに対する国家中央機関の警戒感を示している。これらは、陳靖の言うところの「この三年で少なくとも二十人余りの少数民族同胞が、公開の場で『我々は炎黃子孫ではない』と発言」したという記述（陳靖將軍致胡繩同志的信）と重なる事実であろう。

王仁民の苦悩はさらに続いた。遅々として進まない「炎黃二帝巨塑」建設事業の進展を目指し、事態打開の新機軸として企画した「炎黃二帝」のテレビドラマ化が、新たな批判を招いたのである。テレビドラマ「炎黃二帝」は、一九九二年の河南省炎黃文化研究会の提案を契機に、党・政府および学術界の支持を受けて、制作されたものである。

「涿鹿」の歴史は誰のものか

制作過程で幾つかの意見が出され、シナリオの修正も加えられたが、蚩尤の欠落に注意した者はいなかった。⁷⁹ 河南電視台が撮影したドラマは、一九九六年に北京の人民大会堂で國務院廣播電影電視部（ラジオ映画テレビ省）の孫家正部長（大臣）も参加して試写会が開かれ、高い評価を得、一九九七年二月の「春節」（旧正月休暇）期間に全国放映がなされる。ところが、放送されるやいなや、蚩尤の扱いをめぐり、苗族エリートたちによって組織的な批判キャンペーンが展開され始める。これを受けて、同年六月の中華炎黄文化研究会の例会では、王仁民に対し、その原因を作ったことを理由に、厳しい叱責がなされたのである。⁸⁰

この問題については、先行研究として苗族側の史料を用いた楊志強氏による詳細な検討があり、それによって当時の批判キャンペーンの先鋒が、第八期全国人民代表大会の貴州省代表、苗族の張明達・龍明伍（伍略）であったことを知ることが出来る。⁸¹ 上で見たように、王仁民は、一九九四年に全国人民代表大会の貴州省代表から炎帝・黄帝と蚩尤の三像建設を要求するように申し入れを受けたと回顧している。それが具体的には、張明達・龍明伍によるものであり、「炎黄二帝」への攻撃が一連のものであったことを暗示している。

王仁民は、「炎黄二帝巨塑」建設事業継続への願いを繰り返し述べて回顧を結んでおり、資金難だけでなく、これら「炎黄」顕彰をめぐる緊張関係が、事業の長きに渡る停滞をもたらしたことがうかがえるのである。

「炎黄子孫」をめぐる緊張関係——政策からの分析

実のところ、当局側はいち早く、「炎黄」顕彰がはらむ、こうした危険性を察知していた。

早いものとして、一九八四年五月に、中国人民政治協商会議の第六期全国委員会の第二次会議で、政治協商會議委

員の米暫沈が、「炎黄子孫」という語句を中央の指導者たちが用いることを批判した事例が挙げられる。彼は、「炎黄子孫」という語句の使い方に注意し、党中央の宣伝部に局に転送して参考とすることの要望書⁽⁸²⁾を提出し、先駆的な問題提起を行なったのである。

これに対し、中共中央宣伝部辦公庁は、国家民族事務委員会などへの諮問を経て、「党と国家機関の文書および指導者の正式講話においては、「中華民族」を用いて中国各族の代名詞とするのが好ましいが、「炎黄子孫」という語句が今日の香港・台湾同胞や海外華僑においてはプラスの役割を持つことから、今後この方面の個人署名の文章や一般的な談話、および台湾に対する宣伝の中では、そのまま継続して用いることとする」と回答したという⁽⁸³⁾。

次いで確認されるのは、一九八八年から八九年にかけて、歴史家の葛劍雄が、学術的に見て「炎黄子孫」という語句を「中華民族」「中国人民」と同義語とするのは適当でなく、それは民族団結に害をなすものであると、社会に広く問題提起したことである。当初は上海の『解放日報』（内部刊）紙上で一九八八年に発表された当該論文は、翌一九八九年七月に中央メディアである『光明日報』紙上で再発表され、同年九月から一九九一年にかけて、各地の新聞・学術誌上において様々な議論を誘発した⁽⁸⁴⁾。

こうした状況に対し、「六四」後の不安定な時期に新たな指導者に拔擢された江沢民は、問題の所在を敏感に汲み取り、慎重な態度で臨んだ。彼は、一九九〇年二月十九日、台湾の作家の陳映真を団長として台湾から大陸を訪問した「中国統一聯盟大陸訪問団」と面会した際に、「我々はみな中華民族の子孫です。私は中央に来て仕事をするようになってから、総合的な観点から幾つかの問題について検討をしました。（その一つとして）「中華民族」という言葉は、我々がこれまで常に言ってきた「炎黄子孫」よりも概括度が上であり、それはわが国の各民族を包括する、と私は感じま

「涿鹿」の歴史は誰のものか

す」と述べたのである。⁽⁸⁴⁾

前述のように中華炎黄文化研究会が「中華炎黄文化研究会章程（一九九〇年五月二六日）」で「中華民族」という文言を多用している背景には、当時の中華民族論の盛行に加え、このような中央政界での、「炎黄子孫」を避けて「中華民族」を推奨するという政策の影響があったと見るべきである。中華炎黄文化研究会も、葛劍雄の問題提起に始まる一連の論争を、一九九二年に内部用ニュースレターにまとめており、問題の所在を当事者として強く意識していたと見られる。⁽⁸⁵⁾

中華炎黄文化研究会成立大会後、全国各省では支部として各省ごとの炎黄文化研究会が相次いで成立していく。涿鹿県が帰属する河北省でも、一九九三年七月に「河北省炎黄文化研究会」の成立大会が挙行されている。その際の列席者の発言を見ると、地元河北省の要人の発言は「炎黄」に終始しているのに対し、北京から参加した中華炎黄文化研究会幹部の発言には、「我々の人文始祖炎帝・黄帝の二帝の部族と蚩尤の部族は、かつてこの地にあつて創業し、相争い、我々中華民族の古代文明の象徴である炎黄文化を創り出した」という文言がある。⁽⁸⁶⁾すでにこの段階で、中華炎黄文化研究会の内部では、蚩尤を意識し、実質的にその後の涿鹿の三祖顕彰と重なる問題意識が、注意深く、対外的に発信されるようになっていたのである。

そして一九九五年九月、涿鹿県で「全国首届涿鹿黄帝・炎帝・蚩尤三祖文化學術研討会」が、中華炎黄文化研究会と河北省炎黄文化研究会、および（涿鹿県の属する）河北省張家口市人民政府などの共同発起で開催された。⁽⁸⁷⁾同年の中華炎黄文化研究会「工作報告」には、「炎黄文化を弘揚するには、力を入れて民族団結を促進しなければならない。中華文化はわが国の各族人民が共同で創り出したものである。炎帝・黄帝および蚩尤・堯・舜・禹などは、全て中華

民族の先祖であると認めなければならない」という注目すべき文言が盛り込まれる。⁽⁸⁸⁾

以上のように、同研究会の関心と論調はこの時期明らかに「炎黄」から三祖顕彰へと向かいつつあった。その中で、地元レベルですでに黄帝祠再建事業を始動し、それに対して百萬元の寄付を受けていた涿鹿県は、中華三祖堂創建に事業の切り替えを行ない、結果的に全国に先んじて三祖顕彰を実体化することに成功したのである。

ただし、先に見たテレビドラマ「炎黄二帝」のように、問題は一九九五年以後も頻出することになる。

一九九五年三月、第八期全国人民代表大会の第三次会議で、貴州省苗族代表の張明達・龍明伍（伍略）と布依族代表の陸鎮藩らが、「中央から関係部署に通知し、以後「我々はみな炎黄子孫」という語句を用いず、憲法に規定のある「中国各民族」という言い方を「炎黄子孫」の代替とし、民族団結に利するよう求める提案」を提出、新たな問題提起を行なった。⁽⁸⁹⁾この第八期全国人民代表大会では、前述したように王朝文も貴州省代表の一人であり、かつ民族委員会主任の要職にあった。

先の王仁民の回顧の中にも、一九九四年、全国人民代表大会の貴州省代表からの批判が転送されてきたことが紹介されている。それがおそらく張明達・龍明伍によるものであろうという推測は、すでに述べた。つまり、彼らはまず王仁民に「炎黄二帝」に代えて三祖を顕彰することを要求し、その翌年に全人代に対しても、「炎黄子孫」という語句の使用をやめるよう、提案をなしたのである。

張明達は、さらに一九九六年三月、第八期全国人民代表大会の第四次会議でも改めて要求を行なっている。「中央から全国各地の新聞・出版機関とラジオ・テレビ局に文書を通知し、以後「我々はみな炎黄子孫」という語句を用いず、民族団結に利するよう求める提案」を提出したのである。そこには、「中央から全国各地の新聞・出版機関とラジオ・

「涿鹿」の歴史は誰のものか

テレビ局に文書を通知し、以後「我々はみな炎黃子孫」、「海内・海外の中国人はみな炎黃子孫」という、民族団結を害する誤った言い方をさせないようにし、憲法や党規にある「中国各民族」という正確な言い方を統一的に参照し、あわせて『人民日報』など首都の各新聞上に「その文書を」掲載して、全国が従いやすいようにすべきだ」との文言があったという。⁹⁰⁾

これらはいずれも、「炎黃熱」が加熱し、社会に「炎黃子孫」という文言が蔓延するようになっていく現実⁹¹⁾の中で、漢族／非漢族の立場を越え、政策による然るべき対応を求めて各地から上がった声であった。

(3) 涿鹿「三祖文化」論再考

以上の認識を踏まえ、眼を再び涿鹿に向けてみよう。

まず確認すべき点は、一九九四年四月に涿鹿を訪問し、黃帝祠再建のために百萬元を寄付したシンガポール華人の周穎南が、一九九一年五月の中華炎黃文化研究会成立大会時のメンバーで、理事の地位にあったという事実である。周穎南の日記にも、一九九一年八月の北京訪問時に、同研究会執行会長の蕭克や常務副会長の杜導正、同研究会の下部機構である組織連絡委員会の黃浪華らと中国政府国防部で面談したこと、また一九九三年三月および同年六月の北京訪問時には、「炎黃二帝」像と並んで同研究会発足時の目的の一つであった『中華文化通志』編纂の進捗状況を報告するため、黃浪華が周穎南を訪ねたことなどが記録されている。⁹²⁾先の「章程」で連携を目指すとされていた「海内外」の「炎黃子孫」の一人が、この周穎南であったことは明らかである。彼はその流れに沿って、翌年四月に「炎黃」の伝承地である涿鹿を訪問し、黃帝顓頊のために寄付を申し入れたのである。

地方志記事を整理した先の年表に見るように、一九九四年十月にも、河北省炎黄文化研究会によって黄帝城の視察が行なわれている。それは王朝文ら苗族エリート一行が蚩尤寨を踏査する五日前のことであった。そして一九九五年九月、中華炎黄文化研究会と河北省炎黄文化研究会などの主催で、「全国首届涿鹿黄帝・炎帝・蚩尤三祖文化學術研討会」が開催されるのである。炎黄文化研究会の活動が、涿鹿の三祖顕彰の背景にあったことは明らかである。

一方で、炎黄文化研究会の後押しを受ける側の涿鹿県にも、当事者としての現実的思惑があった。中共涿鹿県委員会宣伝部副部長、県政府城建局長を歴任した高志升が記す以下の内容は、県幹部として一連の展開に接した可能性のある人物による説明として、注目に値する。

シンガポール籍の著名な華人である周穎南氏はわざわざ海外から帰国し、「涿鹿県に」百万元を寄付して黄帝陵廟の再建を提唱した。「〔地元〕社会の各界の人々は、『涿鹿県に』黄帝陵廟を再建する意義は、黄帝の足跡は涿鹿、陝西そして河南新鄭に広く及んでいるが、唯一涿鹿だけが炎帝・黄帝・蚩尤の三祖が共に愛着を持ち、部族の統一と民族の融合とを実現した土地だという点にある、と考えていた。……中共涿鹿県委員会と県政府は、皆の期待に背くことなく、一九九三年から黄帝陵廟の再建に着手した。しかし、『〔地元〕社会の各界は、陝西にはすでに黄帝陵があり、規模も大きく知名度も高いから、我々が同じようなものを作る必要はない、と考え、専門家の検討を経て、炎帝・黄帝・蚩尤の三祖文化を特徴として、『中華三祖堂』を建てることを決定したのである。（高志升「從黄帝陵到三祖堂」⁹³）

「涿鹿」の歴史は誰のものか

「黄帝陵廟」とあるのは、「黄帝祠」を指すものだろう。本論文の冒頭で、涿鹿県副書記の任昌華が「三祖文化」の特徴を、「炎帝・黄帝・蚩尤の三祖が中華民族の文明を創始した当初、「三祖の」足跡は全国の大部分の地域に広く及んだが、最も重要で最も決定的な役割をそなえた出来事は涿鹿において完成された」（「簡談「三祖文化」」）と述べたことを紹介したが、これは上文の趣旨と一致する。涿鹿県は、陝西と河南など他地域の動向を注視し、それとは異なる独自性を追求することを目指した。その結果が、中華三祖堂だったのである。

上の引用文には、河南鄭州の「炎黄二帝巨塑」への言及は見られず、陝西黃陵の黄帝陵と、河南新鄭の関連する動きに言及があるのみである。しかし少なくとも、涿鹿県の一九九三年に始まる「黄帝熱」が、他省への対抗意識を背景に進展したものであることは、明らかであろう。河南鄭州の「炎黄二帝巨塑」は、一九九一年九月に定礎式、一九九四年九月に起工式が挙行されたが、様々な障害のため、工事は思うように進まず、落成式は二〇〇七年まで遅れることになった。黄帝城周辺を主な舞台とした涿鹿県の黄帝顕彰とその後の三祖顕彰をめぐる各種活動、そして中華合符壇建設へと至る展開は、ちょうどこの間の時期に相当する。涿鹿県が、結果的に見れば鄭州の「炎黄二帝巨塑」建設をめぐる紛糾を好機としたとも見て取れるのである。その過程で思いがけずも苗族エリートから関心を向けられ、厳しい批判を受けた涿鹿県であったが、鄭州の王仁民のような対立ではなく、むしろ連携の契機としてそれを利用する方向に向かう。

陳靖はこれを直ちに評価して、「（炎黄顕彰の）実務を担う人々は同意せず、黄河の岸に超世界級の炎黄巨像を建てようとしただけでなく、……涿鹿の大地に「炎黄城」を建設しようとさえしました。幸いにも涿鹿県の党政府の指導者たちはそれを受け入れず、中華民族の大家族の団結に役立つ、蚩尤を含めた「中華民族大団結遺址」を建設するこ

とを決定しました。涿鹿県の指導者たちのこの決定は、見識があり、事実に即して真理を追究したものである」(「陳靖同志就「蚩尤問題」給全国政協主席李瑞環同志写的信」と述べたのである)。

地元振興と民族復権では、両者の思惑は全く異なったが、利害関係は一致した。以後、涿鹿県は、王朝文や陳靖ら苗族エリートたちを三祖顕彰の各種活動に招き、また涿鹿県の任昌華も、貴州での苗族たちの活動に対し、積極的に祝辞や論文を寄せるなど、両者の相互依存の関係は、その後も順調に発展を続けたのである。⁽⁹⁴⁾

このように、二十世紀末から今世紀初めにかけて涿鹿県で展開した三祖顕彰運動は、同時期の中国国内における広汎な「炎黃子孫」論の流行とそれに対する緊張関係を背景に、涿鹿県幹部と苗族エリートたちの次元の異なる熱意が結び付き、中華三祖堂・中華合符壇に成果として結実したものと理解することができる。それは決して一個人や一地方の孤立した事象ではない。またそれは、単純な「炎黃子孫」論の流行による産物でもないのである。

四、結びに代えて

以上、涿鹿のモニュメントから説き起こし、民族始祖論をめぐる複雑な力学に注目して、その背後にある人的関係とそれら相互の影響関係を読み解くことで、一九八〇年代末から一九九〇年代半ばにかけての中国社会における「歴史」に対する多様な関心のあり方を、中国現代史の中に位置付けようとした。

非漢族の民族主義に関心を抱くと、どうしても分離独立の問題にばかり眼を向けがちだが、「中華民族」の枠内での地位獲得を目指す動きを、分離独立を志向する民族集団とは別の分析視角で読み解くことが必要である。すなわち、

「涿鹿」の歴史は誰のものか

漢族／非漢族という対立軸に単純化することなく、漢族のナショナリズムと非漢族のナショナリズムそれぞれが持つ複合性を直視し、当局・漢族・非漢族それぞれが内包する多様なネットワークに注目してそれを読み解き、相互に働く力学を構造的に理解することが不可欠なのである。

本論文での議論にも、漢族／苗族という対立軸では見えてこない論点が、多々含まれていた。涿鹿と北京、苗族と涿鹿とを取り結ぶ「代弁者」としての李庚の立ち振る舞いは、中央の中共幹部としての典型的姿であろう。王仁民は「炎黄」にこだわった結果、十分な対応を図れずに、計画遂行に苦悩する。任昌華は、「炎黄」を抑える方向へと向かう時勢を読み、苗族の異議申し立てと王仁民ら鄭州での事業行き詰まりを好機として、「三祖」を軸とした地方振興策に切り替え、一定の成果を収めるのである。苗族の異議申し立てに対し、漢族社会にあつて全く異なる反応と結果が見られたことに、目を向ける必要がある。

一方で、苗族側の情熱は限りなく純粹であるように見える。陳靖は長征ルートの再訪を通じ、実際に見聞した苗族社会の現実を悲嘆した。しかしそれはかえって情熱の源泉となり、彼は「老紅軍」という特殊な地位を背景に、中共元老たちが集まる中華炎黄文化研究会を人脈のプールとして活用し、歴史像の修正（回復）を中央に働きかけていくのである。これと同時に、全人代代表としての地位を持つ王朝文・張明達らは、北京政界で連携した活動を展開し、陳靖の動きを側面から援護した。そこに見られるのは、単に抑圧に甘んじたり、あるいは異議申し立ての抵抗運動をするという、ステレオタイプ化された非漢族のイメージではない。個人のためではなく、民族全体としての地位獲得を目指し、時には連携して相手に働きかける、したたかな戦略を持った、情熱的民族エリートたちの「連帯」した姿である。

それならば、このような複雑な関係性を背景とした苗族エリートたちの「連帯」が、一九九〇年代後半以後、中国社会の中でどのように展開し、それは現在いかなる状況を形作っているのか。それは「同床異夢」と表現すべきものであるが、具体的論評は、その帰趨が明らかとなるであろう、将来の然るべき時期を待ちたい。

また同様に、紙幅の都合で、一九八〇年代にさかのぼる陳靖の蚩尤「名譽回復」をめぐる問題意識については、合わせて論ずる余裕がなかった。今回、陳靖の蚩尤「名譽回復」にかける情熱について、一九九一年にさかのぼることは確認したが、実のところ彼の「覚醒」は、さらに一九八〇年代半ばにまでさかのぼるものである。そしてそれは、貴州東南部の苗族エリートたちの、文芸創作や口頭伝承の再評価を中心とした主に文芸界での活動に、より古い根を持つ。一方で、苗族エリートたちもまた決して一枚岩ではない。地域間の微妙な対立構造と、多様なネットワークのあり方があり、それは民国期以来の蚩尤をめぐる歴史認識の系譜や、清末以来の各地苗族社会における啓蒙・教育活動のあり方の違いとも関係している。これについては、時間をさかのぼり一九五〇年代から一九八〇年代にかけてを一つながりの問題として、稿を改め詳しく論ずることにしたい。

【註】

(1) 筆者は、二〇一〇年三月と二〇一四年十二月の二度にわたり、涿鹿の現地を調査している。本論文は、その成果を反映したものである。「涿鹿」の歴史評価をめぐる問題については、拙稿「中国民族史像と考古・歴史ナショナルイズム」『歴史と地理』六七九(世界の研究三四二)、東京・山川出版社、二〇一四年、巻頭図版解説・一〇十四頁で紹介したことがある。

(2) 『漢書』卷三八・地理志には「上谷郡……県十五、……涿鹿」とある。「黄帝城」については、江村治樹「中国古代都市研究と現地調査——二〇〇七年十月・蔚県、涿鹿県都市遺跡調査」『春秋戦国秦漢時代の都市とその周辺』(科学研究費補助金(基盤研究C)研

「涿鹿」の歴史は誰のものか

究成果報告書）、二〇〇九年、四四～五七頁を参照。

- (3) 「太史公曰、……余嘗西至空桐、北過涿鹿、東漸於海、南浮江淮矣。至長老皆各往往稱黃帝・堯・舜之處、風教固殊焉。總之不離古
文者近是。……故著為本紀書首」（『史記』卷一・五帝本紀）。一方で、『漢書』には武帝について「元封元年……自遼西歷北辺九原、
歸于甘泉。……四年……歷獨鹿・鳴沢、自代而還」（『漢書』卷六・武帝紀）とあり、司馬遷が涿鹿を訪れたのは、このいずれかで郎
中ないし太史令として武帝の行幸に付き従ったことによるものである可能性が高い。「独（獨）鹿」すなわち「涿鹿」とする説は、藤
田勝久「司馬遷とその時代」東京・東京大学出版会、二〇〇一年、一七三頁を参照。なお、唐代の司馬貞は『史記索隱』で「涿鹿」
について「或作濁鹿、古今字異耳」と説明していることも注目される（五帝本紀）。武帝の行幸については、大櫛敦弘「前漢武帝期の
行幸——その基礎的考察」『日本秦漢史学会会報』五、京都・同学会、二〇〇四年、一一一～一三七頁、および目黒杏子「前漢武帝の
巡幸——祭祀と皇帝権力の視点から」『史林』九四―四、京都・史学研究会、二〇一一年、三七～七十頁を参照。

- (4) 「黃帝者……名曰軒轅。……軒轅之時、神農氏世衰。諸侯相侵伐、暴虐百姓、而神農氏弗能征。於是軒轅乃習用干戈、以征不享、諸
侯咸來賓從。而蚩尤最為暴、莫能伐。炎帝欲侵陵諸侯、諸侯咸歸軒轅。軒轅乃修德振兵……以与炎帝戰於阪泉之野。三戰、然後得其
志。蚩尤作乱、不用帝命。於是黃帝乃徵師諸侯、与蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤。而諸侯咸尊軒轅為天子、代神農氏、是為黃帝。
……合符釜山、而邑于涿鹿之阿」（『史記』卷一・五帝本紀）。

- (5) 本課題組「中華「三祖」文化品牌價值提昇工程研究」『經濟研究參考』二十、北京・經濟研究參考雜誌社、二〇一四年、六一～七九
頁。

- (6) 楊志強「『苗』から『苗族』（ミャオ族）」へ——近代民族集団の形成及び民族的アイデンティティ再構築の過程について」東京・東
京大学大学院総合文化研究科博士論文、二〇〇五年、楊志強「炎黃子孫」と「中華民族」——近代中国における国民統合をめぐる二
つの言説『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』六四、東京・同研究科、二〇〇七年、一二一～一三七頁（楊志強「蚩尤平反」
与「炎黃子孫」——兼論近代以来中国国民整合的兩条路線」『中国農業大学学報（社会科学版）』二七―四、北京・同大学、二〇一〇年、
一〇三～一一三頁）Cheung, Siu-woo（張兆和）, "Appropriating Otherness and the Contention of Miao Identity in Southwest
China", *The Asia Pacific Journal of Anthropology*, Vol.13, No.2, Oxford: Routledge, 2012' および張兆和「在逃遁与攀附之間——
中国西南苗族身份認同与他者政治」納日碧力戈ほか主編『西南地区多民族和諧共生關係研究論文集』貴陽・貴州大学出版社、二〇一

二年、十五〜四一頁。本論文で分析対象の一つとなる蚩尤をめぐる苗族の歴史認識については、涿鹿をめぐる諸現象への関心を欠くものではあるが、曾士才「中国における民族表象のポリテクス——ミャオ族の張秀眉塑像建造運動を例にして」長谷川清ほか編『中国の民族表象——南部諸地域の人類学・歴史学的研究』東京・風響社、二〇〇五年、三〇三〜三三〇頁、徐新建「蚩尤」和「黄帝」——族源故事再検討』『广西民族大学学报（哲学社会科学版）』三〇一五、南寧・同大学、二〇〇八年、二〜十三頁、および鈴木正崇「ミャオ族の神話と現代——貴州省黔东南を中心に」同編『東アジアにおける宗教文化の再構築』東京・風響社、二〇一〇年（後に大幅な修正を加え、鈴木正崇『ミャオ族の歴史と文化の動態——中国南部山地民の想像力の変容』東京・風響社、二〇一二年、二九〜一三頁に再収録）などの先駆的な研究がある。

- (7) 李国太ほか「遺産闡釈与記憶重塑——以中国蚩尤神話之意義轉換為例」貴州省民族学院ほか編『蚩尤文化与旅游產業發展論文集』昆明・雲南民族出版社、二〇一五年、一三八〜一四九頁（李国太ほか「遺産闡釈与記憶重塑——以中国蚩尤叙事的意義轉換為例」『吉首大学学报（社会科学版）』三六―三、吉首・該大学、二〇一五年、一一〇〜一一五頁）、および劉鵬「從中華三祖堂談蚩尤文化開發」前掲論文集二七八〜二八三頁。

- (8) アクターという概念を用いた分析手法については、佐々木智弘「中国の構造的変化と政治過程におけるアクターの多様化」同編『現代中国の政治変容——構造的変化とアクターの多様化』千葉・アジア経済研究所、二〇〇五年、三〜十五頁を参照。

- (9) 本論文は、筆者による一連の「苗族史の近代」に関する研究（拙稿「苗族史の近代」『北海道大学文学研究科紀要』一二四・一二七・一二九・一三〇・一三一・一三二・一三四・二〇〇八〜二〇一一年、二五〜五五・八一〜一二二・二九〜八四・一〇六・一一〜五一・四九〜一三八・一〜五五頁）の最終章に位置付けられる考察である。

- (10) 「中華合符壇記：中華之合符壇、与中華三祖堂成峙、映輝問鼎。景域攀山鎮、西（東）距京畿百餘里、涿鹿山囲、涿水環護、泉涌而不絶、黄帝城・炎帝宮・蚩尤寨、屏蔭而天成也。中華合符壇、意喻為黄帝・炎帝・蚩尤三祖合符涿鹿釜山、以致中華一統歷史之源、起議於乙酉年（公元二〇〇五）、建於丙戌年（公元二〇〇六）春初、歷經五載修築、於庚寅年（公元二〇一〇）秋時而落成。……銘謝諸公・歷史地理学家王北辰・歷史学家李学勤・古建筑專家羅哲文……謹此碑記。中共涿鹿県县委書記王江・涿鹿県人民政府県長陳崗。辛卯年（公元二〇一一年）五月（現地石碑「中華合符壇記」碑文、二〇一四年十二月調査）、および涿鹿県地方志編纂委員会編『涿鹿県志（一九八九〜二〇〇九）』石家莊・河北人民出版社、二〇一四年、三九・七四一〜七四二頁。筆者が二〇一〇年三月に現地

「涿鹿」の歴史は誰のものか

を訪れた際には、基壇と五十六本の石柱のみが存在していた。基壇中央に巨大な九龍のモニュメントを設置する中華合符壇第二期工事は、二〇一〇年五月に起工、同年八月に竣工したとされる（林建忠ほか主編『礬山志』涿鹿・涿鹿県礬山鎮地方志編纂委員会、二〇一〇年十二月、八五～八六頁）。まず基壇だけを急ぎ完成させたのは、後述するように二〇〇八年八月に北京で開催されたオリンピックの聖火リレーのための採火地となることが計画されていたことと関係すると見るべきであろう。

- (11) 前掲註10『涿鹿県志（一九八九～二〇〇九）』十四・七四一頁、および涿鹿県地方志編纂委員会編『涿鹿県志（重修統修版）』石家荘・河北人民出版社、二〇〇五年、五十頁。

- (12) 「文穎曰、……涿鹿在上谷、今見有阪泉地黃帝祠」（『漢書』卷二三・刑法志注所引）、「帝王世紀（紀）曰、黃帝所都、有蚩尤城・阪泉地・黃帝祠」（『統漢書』郡國志・上谷郡涿鹿条注所引）、『魏土地記』曰、……有涿鹿城、城東一里有阪泉、泉上有黃帝祠」（酈道元『水經注』滹水篇涿水条所引）。

- (13) 神瑞二年六月・泰常七年九月（『魏書』卷三・太宗紀）、神龜元年八月（同卷四上・世祖紀）、和平元年正月（同卷一〇八之一・礼志）。
- (14) 「据史書記載、黃帝泉正北方有黃帝祠、二十世紀五十年代只余殘垣斷壁。一九九四年六月在原址重建黃帝祠、一九九七年十月建成後更名爲中華三祖堂」（前掲註10『涿鹿県志（一九八九～二〇〇九）』七四一頁）。地元出身の文筆家である曲辰は、地名考証の成果の中で、現「黃帝泉」の南に位置する上七旗村にかつて存在した泉が「阪泉」（『水經注』の「張公泉」）であり、そこには本来、「黃帝祠」があり、日中戦争中に破壊されたこと、現「黃帝泉」にもともと存在した祠は「応龍祠」と地元で呼ばれていたことを記している（曲辰「黃帝戦蚩尤、戦炎帝、建都涿鹿諸遺址考辨」中国政治協商會議涿鹿県委員会編『千古文明開涿鹿（文史特輯）』涿鹿・同委員会、二〇〇九年、二〇〇～二一九頁。二〇〇六年に至り、現「黃帝泉」敷地整備のために涿鹿県輝耀鎮羅宴溝村に移築されたという廟が（前掲註10『礬山志』七十頁）、まさにこの「応龍祠」であろう）。

- (15) 涿鹿県地名辦公室編『涿鹿風物志初稿』涿鹿・同辦公室、一九八一年。

- (16) （張家口市政協委員）陳富城『涿鹿炎黃史跡集說』不明・筆者自刊？、一九九四年七月、および劉建成主編『軒轅黃帝在涿鹿』涿鹿・涿鹿県文化局、一九九四年十月。

- (17) 前掲註11『涿鹿県志（重修統修版）』四三～五十頁。一九九五年の「三祖文化研討会」については、宋鎮豪「全国首届涿鹿黃帝・炎帝・蚩尤三祖文化學術研討会総述」『中国史研究動態』十二、北京・中国社会科学出版社、一九九五年、二一～二三頁、無記名「首届

黄・炎・蚩三祖文化學術研討会在河北省涿鹿県挙行」『中国歴史学年鑑一九九六』北京・三聯書店、一九九七年、四六三～四六四頁、および「全国首届涿鹿黄帝・炎帝・蚩尤三祖文化學術研討会文件」『全国首届涿鹿黄帝・炎帝・蚩尤三祖文化學術研討会論文摘要』『先秦史研究動態』総二八、中国先秦史学会、一九九七年、一～七十頁を参照。

- (18) 任昌華「簡談「三祖文化」」『民主』十一、北京・中国民主促進会中央委員会、一九九七年、三二～三三頁。その文言を手直した再投稿論文として、任昌華「簡談「三祖文化」始説」貴州苗学研究会秘書処編『苗学研究通訊』九、貴陽・同研究会、一九九八年、二一～二五頁、および「三祖文化」始説」六盤水市苗学会資料集編委會編『苗学会資料集』同学会、一九九九年、一五六～一六一頁（前掲註10『涿鹿県志（一九八九～二〇〇九）』一〇二～一〇三頁に再収録）がある。なお、『涿鹿県志（一九八九～二〇〇九）』一一七頁には、任昌華は一九九四年に論文「三祖文化始説」を執筆したとある。

- (19) 涿鹿県志編纂委員会編『涿鹿県志』河北人民出版社、一九九四年、三五一頁、および前掲註11『涿鹿県志（重修統修版）』三五三頁。

- (20) 前掲註11『涿鹿県志（重修統修版）』三七二～三七三頁。

- (21) 任德泉「傾心国宝志不移」前掲註14『千古文明開涿鹿（文史特輯）』一二七～一三〇頁。

- (22) 趙育大「李学勤先生是三祖文化的倡導与支持者」前掲註14『千古文明開涿鹿（文史特輯）』三三～三五頁。当時の李学勤の中国上代史に対する考え方は、李学勤「走出「疑古時代」」『中国文化』七、北京・三聯書店、一九九三年、一～七頁を参照。彼は一九九〇年代後半に、上代史研究の国家プロジェクト「夏商周断代工程」の主筆者の一人となる。同「工程」については、岳南『千古学案——夏商周断代工程紀実』杭州・浙江人民出版社、二〇〇一年（朱建榮ほか訳『夏王朝は幻ではなかった——二〇〇〇年遡った中国文明史の起源』東京・柏書房、二〇〇五年）を参照。

- (23) 前掲註11『涿鹿県志（重修統修版）』前掲註10『涿鹿県志（一九八九～二〇〇九）』、および任漢華ほか主編『涿鹿五千年』涿鹿・中華三祖聖地文化産業發展有限责任公司ほか、二〇〇八年所収「大事記」参照。

- (24) 李懷全「志補（一九九四年五月）」前掲註19『涿鹿県志』巻末一～三頁。この「志補」掲載の経緯については、李懷全「涿鹿県志編纂始末」前掲註14中国政治協商会議涿鹿県委員会編『千古文明開涿鹿（文史特輯）』三七～四一頁所収参照。周穎南については、高志升「周穎南功鑄三祖堂」『千古文明開涿鹿』涿鹿・涿鹿建設局、一九九九年、九六～九九頁、および周穎南『六十年風雨歷程』厦門・厦門大学出版社、一九九九年を、一九九四年の涿鹿訪問の詳細については、周穎南『訪華日記（周穎南文庫卷六）』北京・北京師

「涿鹿」の歴史は誰のものか

範大学出版社、二〇〇六年、九五～一〇五頁を参照。

- (25) 周穎南「中華文明始涿鹿」前掲註23『涿鹿五千年』一二二～一二四頁、および前掲註14『千古文明開涿鹿（文史特輯）』一九二～一九五頁。「中華文明始涿鹿」という文章が、「黃帝祠」再建の起工式に際し、一九九四年四月二十九日に涿鹿県に提出されたものであることについては、前掲註24『訪華日記』九六頁参照。

- (26) 前掲註11『涿鹿県志（重修統修版）』四三頁、前掲註23『涿鹿五千年』六二～六三頁、および前掲註24『訪華日記』九六頁。

- (27) 前掲註24「周穎南功鐫三祖堂」は、関連資料中で唯一、一九九四年四月に周穎南涿鹿訪問の際に参加したのが「中華三祖堂」起工式であったと記述するが、他史料の記述と歴史的経緯から見て、黃帝祠の起工式であったと見るべきであろう。

- (28) 龍健剛「給蚩尤以公道、還歷史以真実」二〇一一年（中国インターネットサイト「龍建剛微言博議的博客」http://blog.sina.com.cn/s/blog_6f2287730100wl1y.html）二〇一五年九月九日閲覧）、および鄭永漢ほか「応肯定蚩尤的始祖地位」『貴州民族報』一九九五年十一月二十七日（筆者未見、『新華文摘』二、北京：人民出版社、一九九六年、一九三頁に要旨掲載）。

- (29) 余正生「尋祖覓宗訪涿鹿——十八年前陪同王朝文老省長首赴河北涿鹿考察始祖蚩尤部落遺址追記」蚩尤歷史文化研究基地編『蚩尤歷史文化論壇論文匯編』丹寨：同基地、二〇一二年、一七七～一八〇頁（蚩尤歷史文化研究基地領導小組辦公室編『祭尤節与蚩尤——二〇一二丹寨祭尤節文化論壇論文集』北京：中国文联出版社、二〇一五年、一八二～一八六頁）、および余正生「尋祖覓宗訪涿鹿」（『中国苗族網』二〇一四年十月二十五日（中国インターネットサイト「360doc 個人圖書館」転載、http://360doc.com/content/15/0812/23/16043777_491289381.shtml）二〇一六年六月二二日閲覧）。

- (30) 北京市政府などの政府機関による組織、「北京改革和發展研究会」のインターネットサイトで、その構成員として紹介された李庚の経歴には、「首都旅游集團主席研究員、……曾任北京市委研究室發展戰略処副処長、連絡処・國際処処長、……北京市旅游公司總經理、首都社会經濟發展研究所秘書長」とある（<http://www.bghf.org.cn/gsjy.asp>）二〇一六年四月十一日閲覧）。

- (31) 會議秘書処「『全國首屆涿鹿黃帝・炎帝・蚩尤三祖文化學術研討會』會議紀要」前掲註17『先秦史研究動態』総二八、北京：中国先秦史学会、一九九七年、一～二頁、および前掲註10『涿鹿県志（一九八九～二〇〇九）』一一八～一九九頁。前掲註28鄭永漢ほか「応肯定蚩尤的始祖地位」中の李庚の発言は、新聞への掲載時期から見て、その直前に開催された同研討會参加当時の彼の考え方を示す内容として理解すべきであろう。

- (32) 鄭楊「二〇〇八年北京奧運旅游重大項目及慶典策劃（課題劃策人・李庚）劉淇主編『北京奧運經濟研究』北京・北京出版社、二〇〇三年一月、四九六～五一〇頁。
- (33) 李增瑞『聖火耀中華——北京奧運聖火國內伝通全紀錄』北京・人民武警出版社、二〇〇九年、三五三～三六四頁。
- (34) 前掲註11『涿鹿県志（重修統修版）』三七二～三七三頁。二〇〇三年二月以後に執筆されたと見られる任昌華「合符釜山与合符文化」は、前掲註23『涿鹿五千年』一二四～一二七頁所収。
- (35) 涿鹿県人民政府『中華三祖聖地——涿鹿』涿鹿・同政府、二〇〇五年、二六～二七頁には、現状と異なり「九龍柱」を設けない基礎完成予想図と共に、二〇〇三年の『北京奧運經濟研究』出版と、李庚によるオリンピック聖火分配地としての「中華合符壇」案について紹介がなされている。
- (36) 涿鹿のモニュメントや関連施設の形成過程について考える上で、任昌華・周穎南・李庚の他に、涿鹿県筆架山南の「小山村」出身の文筆家、曲辰（孫向東）の役割にも触れておく必要がある。曲辰は『軒轅黃帝史跡之謎』（北京・中国社会科学出版社、一九九二年）、『黃帝与中華文明』（北京・中国華僑出版社、二〇〇四年（任昌華との共著）を上梓し、涿鹿の黃帝関連史跡の考証論文『黃帝戦蚩尤（戦炎帝建都涿鹿諸）遺址考辨』は、県政府にも高く評価され、地元刊行物にも繰り返し掲載された（涿鹿県委宣伝部ほか編『千古文明開涿鹿』不明、一九九三年、五十六～六六頁、および前掲註14『千古文明開涿鹿（文史特輯）』二〇〇〇～二〇〇二頁）。ジャーナリズムの世界で、涿鹿県内の特に黃帝関連史跡の重要性を世に訴え、「結果的」に地元の三祖顕彰の動きを後押しした曲辰の事績については、高志升「曲辰力解千古謎」前掲註24『千古文明開涿鹿』九九～一〇一頁も参照。
- (37) 王朝文・余正生・張永祥・李金池ら苗族エリートたちの経歴については、貴州省苗学研究会編『苗族人物（苗学研究通訊十・人物專集）』貴陽・同会、一九九七年、三六～三七・二三八～二三八・二〇一～二〇二・一九〇～一九一頁を参照。
- (38) 前掲註29「尋祖覓宗訪涿鹿」。
- (39) 前掲註29「尋祖覓宗訪涿鹿」。
- (40) 前掲註1「中国民族史像と考古・歴史ナシヨナリズム」および前掲註9「苗族史の近代」。関連する諸研究については、前掲註6の諸論考も参照されたい。
- (41) 貴州苗学研究会秘書処編『苗学研究通訊』創刊号、貴陽・同研究会、一九八九年。貴州苗学研究会の成立と蚩尤顕彰を含めたその

「涿鹿」の歴史は誰のものか

諸活動については、曾士才「ミャオ——交差する民族エリートたちの思いと願い」末成道男ほか編『講座世界の先住民民族——東アジア』東京・明石書店、二〇〇五年、二四四～二六〇頁、および前掲註6楊志強「苗」から「苗族（ミャオ族）」へ「一六六～二五〇頁、楊志強「炎黃子孫」と「中華民族」、
「蚩尤平反」与「炎黃子孫」を参照。

- (42) 王鴻儒「老紅軍作家陳靖將軍文芸創作的光輝歷程」貴州省政協文史資料委員會編『貴州少數民族文史資料專輯』北京・中國文史出版社、一九九一年、三九〇～四八頁、前掲註37「苗族人物」二一六～二一七頁、吳運宏ほか「人物列伝（下）」吳榮臻主編『苗族通史』五、北京・民族出版社、二〇〇七年、一三三～一三四頁、および貴州省鹽安縣地方志編纂委員會編『鹽安縣志』貴陽・貴州人民出版社、一九九五年、二六三～二六六・六八〇～六八三頁。

- (43) 前掲註6「苗」から「苗族（ミャオ族）」へ「一六六～二五〇頁、
「炎黃子孫」と「中華民族」および「蚩尤平反」与「炎黃子孫」。

- (44) 前掲註6「苗」から「苗族（ミャオ族）」へ「二三七～二三八・二四九頁註59「陳靖同志給涿鹿縣領導的信」、
「炎黃子孫」と「中華民族」一、二六・一三六頁註10「陳靖同志給涿鹿縣領導的信」、および「蚩尤平反」与「炎黃子孫」一〇六頁註1「陳靖將軍致涿鹿縣委・縣政府的公開信（一九九五・〇三）」。

- (45) 楊志強氏が前掲註44「蚩尤平反」与「炎黃子孫」一〇六頁註1に挙げた「陳靖同志致涿鹿縣委・縣政府的公開信（一九九五・〇三）」で、「県委」とあるのがそれであろう。またそこで書簡の日付を一九九五年三月とするのは、本文での議論から考えるなら時期的に符合せず、また初出の前掲註6「苗」から「苗族（ミャオ族）」へおよび「炎黃子孫」と「中華民族」の註釈には見られない文言であることから、追記による誤りと判断される。

- (46) 「陳靖將軍致胡繩同志的信」（前掲註18「苗学会資料集」一七五～一八四頁所収）、および「致中国社会科学院院長信」中共鹽安縣委党史研究室編『苗族紅軍作家 陳靖作品選』北京・党史出版社、二〇一五年、二九二～二九七頁。原文は「這封信主要是一項建議——為苗族鼻祖蚩尤正名、望能在百忙中分神賜教、予以可能的支持。近十年來、我結合「重返長征路」的使命、對這件事作了大量的調查研究、尋訪了湘・黔・川・滇・桂及海南等省的一些苗山山寨以及一此具有代表性的苗族家庭、并翻閱了一些県志・史書与各方面的史料、也請教過一些鄉土教授、海外学者和少數民族作家。大多數人認為、這是件順理成章的事、早就應完成而未完成的事、如果還不予以抓紧落實、將會給後代留下遺憾的。中華人民共和國成立後、在馬克思主義的光芒下、使許多被歷史扭曲的人物、如「拳匪」・「洪逆」

及「閩賊」都先後恢復了本來面目。不知何故、總把蚩尤封存在「另冊」之中、我們這個歷史上最能忍氣吞聲的苗族、也不敢理直氣壯地過問自己祖先事。不過、那些生活在深山密林裡的苗族老人、却能把五千年來的苗族奔波史連講幾天幾夜。不論是苗家人的口頭史、還是數千年來的文字史、都承認苗族先民是一個文化悠久、歷史古老的民族。……數千年來的大量史書幾乎都承認的事實——蚩尤是同黃帝・炎帝「平起平坐」的三先人、三大部落的三代表。原來居住在黃河中上游流域的炎帝和黃帝、同居住在黃河中下游的蚩尤、是共建中華文化的第一批祖先、這幾乎是所有「國史」都沒有否認的。……由此也反映了中華民族的不可分割、不能隔離的客觀存在。可是、近三四年有的同志總是好孤立、片面地看待問題、只是注意眼前某種需要而搞「炎黃熱」。這無意中播下中華民族「大家庭」中不和睦的種子。近三年中至少有二十來個少數民族的同胞、在公開場合表露說、「我們不是炎黃子孫」。但他們可以接受「炎黃蚩」是中華民族的三個最早祖先這個觀點。……面對滾騰奔來的二十一世紀、如果我們能使中華民族大家庭的「三兄長」喜聚一堂、這對全國・全中華民族以及全世界來說、都將是一件具有遠大建設意義的大好事啊。……今天、向胡繩同志定寫這封匯報信、意在請您為這件「家務事」主持個公正。不妥之處、請指教。我是個軍人、特此致以軍禮。陳靖 一九九四・十一月于五指山中」（陳靖將軍致胡繩同志的信）である。

(47) 湘西自治州政協文史學習委員會編『湘西苗族百年史錄』下、北京・方志出版社、二〇〇八年、八七二～八七三頁。楊志強氏は、前掲註6楊志強「『蚩尤平反』与『炎黃子孫』」一〇六頁註2「陳靖將軍致胡繩同志的信」において「一九九五—〇四」と注釈するが、根拠不明であり、従いがたい。

(48) 中国社会科学院院史研究室編『中国社会科学院編年簡史（一九七七—二〇〇七）』北京・社会科学文献出版社、二〇一〇年、四四一～四四三頁。

(49) 「陳靖同志就「蚩尤問題」給全國政協主席李瑞環同志写的信」（前掲註28龍建剛「給蚩尤以公道、還歷史以真実」所載）。原文は「我是一個苗裔紅軍老戰士、離休後致力於長征史研究与民族問題探討。近十年來多次重走長征路、行程十萬多公華里。在反復調查中、除寫了百萬字的文章外、也陸續向有關領導部門或領導同志……、作過口頭或書面的匯報。……此刻向李主席写信、中心是呈述一個建議……為苗族最高祖先——蚩尤平反正名。蚩尤的後代——苗族、是一個歷史悠久、特点突出的古老民族。……三年前、一些漢族同志為弘揚中華民族文化、凝聚國內外華裔同胞、給民族大家庭中出生最早的兄長——炎帝・黃帝塑鑄紀念像。這本來是個很好的願望、可是考慮不够全面、尤其是不能同正統思想脫勾、實際起了一種播下民族不睦種子的負作用、滋生着民族離心力。有人提出補救辦法、建議解

「涿鹿」の歴史は誰のものか

放蚩尤、把「炎黄蚩」三兄長并提出來、這既符合馬克思主義的民族觀、也體現了漢族老大哥的大度与胸襟、更是同中華民族大家庭歷史的形成緊相吻合。但担負實際工作的同志不同意、不僅要在黃河岸上樹立超世界的炎黄巨像、而且把數千年來一致公認、一貫下來的——黃帝・炎帝・蚩尤「三部落」說成「兩大部落」、甚至還要進一步為那場兄弟相煎的原始大內戰揚威顯能、在打敗蚩尤和驅趕苗族南下的涿鹿大地上建造「炎黄城」、幸有涿鹿縣的領導這一決策是有遠見的、是實事求是的。……尽管百家各有所見、然而這樣的事實是誰也不能抹掉的、即蚩尤与黃帝・炎帝是平起平坐、鼎立黃河流域、創建中華文化的三先人、是中華民族大家庭中的三兄長。……望能得到李主席和其他政協同志們的分心關照、賜教指正、予以落實之。并望回信。此致軍札。陳靖 一九九五年元月十七日于南京」である。陳靖「致全國政治協商會議主席李瑞環的信」前揭註46「苗族紅軍作家 陳靖作品選」二八五～二九一頁は、同一史料であるが、原文末に日付を欠く。拙論の中で以下に検討するもう一つの史料「關於陳靖同志致李瑞環主席的信及苗族問題的意見報告」は、以上二通の陳靖による國家中央に対する申し入れに対する正式回答であり、それが「一九九五年春」とされる（陳靖・春坦「炎黄蚩尤關係之我見」『唯美』八・九増刊、南京：中共江蘇省委党校、一九九六年、一〇九～一二二頁）。これによれば、本史料「陳靖同志就「蚩尤問題」給全國政協主席李瑞環同志写的信」の日付、すなわち「一九九五年元月十七日于南京」は信頼し得る記述と見るべきである。ただし、インターネットサイト上に転載されたその文言には不完全なところがあり、本文での引用は、その部分を陳靖「致全國政治協商會議主席李瑞環的信」で補った。

(50) 前掲註49「炎黄蚩尤關係之我見」に、「一九九五年春、中国社会科学院」による「關於陳靖同志致李瑞環主席的信及苗族問題的意見報告」の一部内容が引用、吳榮臻「導論」前掲註42「苗族通史」一、三七～四十頁に、「中国社会科学院民族研究所」の署名を持つ「關於陳靖同志致李瑞環主席的信及苗族問題的意見報告」の一部内容が引用、雲南省彝良縣民族宗教事務局編『彝良少数民族風采』昭通：雲南亞太彩印有限公司駐昭辦、二〇〇四年、一〇二～一〇七頁に、「中国社会科学院受政協主席李瑞環委托、对老紅軍戰士陳靖來信論及苗族問題的回復」の大部分が引用されている。三者の字句を相互に比較すると、細部まで一致が確認出来ることから、同一の史料を引用したものと判断される。

(51) 洪振快「前任執行主編親述——『炎黄春秋』之死」（香港インターネットサイト「端传媒 Initium Media」<https://theinitium.com/article/20160717-mainland-yanhuangchunqiu/>、二〇一六年七月三十日閲覧）。

- (52) 及川淳子『現代中国の言論空間と政治文化——李銳ネットワークの形成と変容』東京・御茶の水書房、二〇〇二年、八九～一六頁、江藤名保子『中国ナショナリズムのなかの日本——「愛国主義」の変容と歴史認識問題』東京・勁草書房、二〇一四年、一三二頁、および前掲註6『「苗」から「苗族（ミャオ族）」へ』・「炎黃子孫」と「中華民族」・「蚩尤平反」与「炎黃子孫」。
- (53) 「中華炎黃文化研究会章程（一九九一年五月十日）」『中華炎黃文化研究会会刊』一、北京・同会、一九九一年、十二～十四頁。
- (54) 「中顧委副主任薄一波同志在中華炎黃文化研究会成立大会上的講話」前掲註53『中華炎黃文化研究会会刊』一、三～四頁。
- (55) 黒伯理「我的四点意見」『中華炎黃文化研究会会刊』二、北京・同会、一九九二年、七九頁。黒伯理については、「中華炎黃文化研究会会長・副会長名單」前掲書四九頁、および黒良杰ほか編『「勝」并存絵人生——黒伯理照片選編集』香港・藍月出版社、二〇〇八年を参照。
- (56) 徐炳昶（旭生）『中国古史的伝説時代』上海・中国文化服務社、一九四六年、二四～二三頁（『民国叢書』二一七三、上海・上海書店、一九九〇年影印所収）、および杜夢華編『告訴您一個真实的蚩尤』聊城・不明、二〇〇九年ほか。
- (57) 喻松青「談有關炎黃文化的兩個問題」前掲註55『中華炎黃文化研究会会刊』二、七九～八十頁。
- (58) 「中共中央政治局常委李瑞環同志在中華炎黃文化研究会成立大会上的講話」前掲註53『中華炎黃文化研究会会刊』一、一～二頁。
- (59) 陝西省地方志編纂委員會編『陝西省志七五 黃帝陵志』西安・陝西人民出版社、二〇〇五年、三二二～三二三頁。
- (60) 前掲註59『陝西省志・黃帝陵志』一五二～一五五・一九五頁、李瑞環「整修、保護好黃帝陵（一九九四年四月六日）」全國政協辦公庁編『李瑞環同志關於統一戰線和人民政協工作的講話選編』北京・同庁、一九九八年、一二八頁。
- (61) 蕭克「弘揚中華民族優秀文化、促進社會主義精神文明建設——在中華炎黃文化研究会成立大会上的講話」『人民日報』一九九一年五月十一日第三版および前掲註53『中華炎黃文化研究会会刊』一、六～十一頁。
- (62) 「鄭州市黃河遊覽區興建「大禹」彫塑座談會紀要（一九八一年）」河南省炎黃文化研究会編『開拓』鄭州・河南人民出版社、二〇〇九年、一五九～一六五頁、および王仁民『大河魂』鄭州・黃河水利出版社、二〇〇〇年、一〇一～二四〇頁。
- (63) 炎黃二帝巨型塑像籌建委員會辦公室『中華炎黃文化研究会炎黃二帝巨型塑像籌建委員會辦公室文件資料匯編（一）』北京・同委員會、一九八八年、「炎黃二帝巨型塑像籌建大事記」『中華炎黃文化研究会炎黃二帝巨型塑像籌建委員會辦公室ほか編』『中華人文始祖——炎黃二帝巨塑奠基紀念文集』鄭州・河南人民出版社、一九九一年、一五二～一六〇頁、「中華炎黃文化研究会大事記（一九八八年十二月～一九八八年十二月）」

「涿鹿」の歴史は誰のものか

九九二年十二月」前掲註55『中華炎黄文化研究会会刊』二、三八～四五頁、および前掲註62『大河魂』二四一～三一五頁。中華炎黄文化研究会の組織体制については、中華炎黄文化研究会編『十年歷程（一九九一年～二零零一年）』北京・東方紅書社、二〇〇一年、五九頁を参照。

(64) 「関于成立炎黄二帝巨塑籌資委員會的決定（一九九五年二月二四日）」中華炎黄文化研究会炎黄二帝巨塑塑像籌建委員會辦公室ほか編『中華炎黄文化研究会炎黄二帝巨塑塑像籌建委員會辦公室・河南省炎黄文化研究会文件資料匯編（二）』不明・同委員会ほか、一九九五年、一三四～一三五頁、および前掲註62『開拓』口絵図版。

(65) 同研究会の大事記（年表）でも、一九八八年十二月に開催された炎黄二帝巨塑塑像籌建委員會の成立大会が起点とされている。前掲註63『中華炎黄文化研究会大事記（一九八八年十二月～一九九二年十二月）』参照。

(66) 「炎黄二帝巨塑塑像籌建委員會章程（一九八八年十二月二日）」前掲註63『中華炎黄文化研究会炎黄二帝巨塑塑像籌建委員會辦公室文件資料匯編（一）』七～八頁、前掲註63『中華人文始祖』一四〇～一四一頁。なお、「炎黄二帝巨塑塑像籌建委員會在京部分副會長、部分常委座談會記錄（一九八八年十二月二日）」前掲『中華炎黄文化研究会炎黄二帝巨塑塑像籌建委員會辦公室文件資料匯編（一）』五一～六九頁によれば、座談會当初、本委員會の名称は「炎黄二帝巨塑塑像贊助活動委員會」であったが、それが問題視されて「炎黄二帝巨塑塑像籌建委員會」と同日改称されたことが分かる。

(67) 「中華炎黄文化研究会章程（一九九〇年五月二六日）」前掲註63『中華炎黄文化研究会炎黄二帝巨塑塑像籌建委員會辦公室文件資料匯編（一）』二五〇～二五四頁。

(68) 費孝通「中華民族多元一体格局形成的特点（一九八八年十一月）」『群言』三、北京・群言雜誌社、一九八九年三月、十一～十四頁、および費孝通ほか『中華民族多元一体格局』北京・中央民族学院出版社、一九八九年七月（西澤治彦ほか訳『中華民族の多元一体構造』東京・風響社、二〇〇八年）。本論考の民族史論的位置付けについては、拙稿「中国民族論と抗戦下の中——現地調査報告」『史朋』四三、札幌・北海道大学東洋史談話会、二〇一〇年、十八～四一頁、および前掲註1拙稿「中国民族史像と考古・歴史ナシヨナリズム」参照。

(69) 費孝通「弘揚優秀傳統、實現「文化自覺」——在中華炎黄文化研究会第二屆理事會全体會議上的講話」『中華炎黄文化研究会会刊（第二屆理事會全体會議專輯）』八、北京・同研究会、一九九八年、三頁。

(70) 陳靖「致中華炎黃文化研究会會長蕭克的信（一九九八年十二月一日）」前掲註46『苗族紅軍作家 陳靖作品選』二九八～三〇三頁。蕭克については、中華炎黃文化研究会編『蕭克印象』北京：中央文獻出版社、二〇一〇年参照。

(71) 前掲註61蕭克「弘揚中華民族優秀文化」。

(72) 「河殤」の内容については、蘇曉康編（鶴間和幸訳）『黄河文明への挽歌——「河殤」と「河殤」論』東京：学生社、一九九〇年を、その顚末については、清水徳蔵「河殤」と中国の近代化『アジア研究所紀要』十六、武蔵野・亜細亜大学アジア研究所、一九八九年、九一～一二五頁、および坂元ひろ子「中国近代の思想文化史」（岩波新書一六〇七）、東京：岩波書店、二〇一六年、二七六～二七九頁参照。「河殤」と一九八〇年代中国知識人の「文化（論）熱」との関係性、およびその二十世紀中国思想史の中の位置付けについては、Rana Mitter, *A Bitter Revolution: China's Struggle with the Modern World*, Oxford: Oxford University Press, 2004（筆者未見、吉澤誠一郎訳『五四運動の残響——二十世紀中国と近代世界』東京：岩波書店、二〇一二年、二四三～二八三頁）、および前掲『中国近代の思想文化史』を参照。

(73) 前掲註66「炎黃二帝巨型塑像籌建委員會在京部分副會長、部分常委座談會記錄（一九八八年十二月二日）」五八～五九頁。

(74) 王仁民「說黄河、斥「河殤」」『解放軍報』一九八九年八月二七日第二版、および鄭波「黄河衛士——記黄河遊覽区党委書記王仁民（一九八九年）」前掲註62「開拓」二〇七～二一二頁。「河殤」の原文は、前掲註63『中華炎黃文化研究会炎黃二帝巨型塑像籌建委員會辦公室文件資料匯編（一）』一八〇～一八五頁を参照。

(75) 緒形康「『秘教的な儒教』への道——現代中国における儒教言説の展開」石井知章編『現代中国のリベラリズム思潮——一九二〇年代から二〇一五年まで』東京：藤原書店、二〇一五年、四四七～四七四頁。一九八〇年代「文化（論）熱」の反作用としての一九九〇年代「学術史／国学熱」とそれに対する省察は、賀照田（鈴木将久訳）「困惑と不安の中の模索——雑誌編集から見た中国知識界のいま」『中国が世界に深く入りはじめたとき——思想からみた現代中国』東京：青土社、二〇一四年、二五～五十頁、および徐友漁（石井知章訳）「九〇年代の社会思潮」前掲『現代中国のリベラリズム思潮』五五～八九頁を参照。

(76) 一九九〇年代の「愛国主義」キャンペーンについては、砂山幸雄「ポスト天安門時代における中国ナショナリズム言説の諸相」『東洋文化』八四、東京：東京大学東洋文化研究所、二〇〇四年、七～四二頁、Wang Zheng, *Never Forget National Humiliation: Historical Memory in Chinese Politics and Foreign Relations*, New York: Columbia University Press, 2012, pp. 95-117（伊藤真

「涿鹿」の歴史は誰のものか

訳『中国の歴史認識はどう作られたのか』東京・東京経済新報社、二〇一四年、一四一〜一七二頁）、および前掲註52藤名保子『中国ナショナリズムのなかの日本』を参照。「愛国主義」キャンペーンと黄帝顕彰との関係性については、松村嘉久『中国・民族の政治地理』京都・晃洋書房、二〇〇〇年、一八五頁、および渡辺靖『文化』を捉え直す——カルチュラル・セキュリティの発想』（岩波新書一五七三）、東京・岩波書店、二〇一五年、十八〜十九頁に、簡単な言及が見られる。

(77) 前掲註62『大河魂』三一三〜三三五頁。

(78) 前掲註62『大河魂』三一九〜三三七頁。原文は「一九八八年、広西壮族自治区記協主席王笠夫率壮族赴京參觀団到黄河游覽区參觀。我接待了他們、并和他們談到炎黃二帝是中華民族的人文始祖和興建炎黃二帝巨塑問題。聽完後、他向我提出「我們広西壯族不是炎黃子孫、壯族文化比漢族文化還早」、并說「這個問題以後我再來談吧」。一九九一年四月份、他給我來信說、關於炎黃二帝與中華文化這個問題想在一起談談、交換交換意見。他看到炎黃二帝巨塑奠基的報道後、一九九一年十月份專程從広西來到鄭州、由河南記協副主席周政同志陪同前來遊覽區。他非常認真而誠懇地向我提出了三個問題、讓我回答。第一個問題是、炎黃二帝與黄河文化有甚麼關係。第二個問題是、黄河文化與中華文化的關係又是甚麼。第三、壯族文化有六千多年的歷史、而漢文化有五千年歷史、壯族比漢族還早、壯族不是炎黃子孫。……時隔不久、從北京來了一位老紅軍、名叫陳靖、是由杜導正同志介紹前來找我的、在游覽區住了兩天。他說他本人不是苗族、他愛人是苗族。他講、你興建炎黃二帝巨塑不利于民族團結、因為炎黃二帝不能代表中國各個民族、若要代表的話、應該把苗族的代表人物蚩尤塑像和炎黃二帝一起建起來。他說、歷史上的炎帝・黃帝與蚩尤是弟兄三人、如果立像都立起來、這樣可以代表中華民族。當時他談得很激動。他說、英國有位歷史學家曾講過、世界上有兩個民族是最偉大的優秀民族。一個是猶太族、一個是苗族、他們流落在世界各地、困難深重。苗族的代表人物蚩尤與黃帝・炎帝一起、都活動于黄河和長江流域。蚩尤发明了青銅・稻子、是很有功勞的。後來炎黃和蚩尤相爭、把蚩尤打敗了、就把蚩尤描繪成野獸、而蚩尤的後代就跑到雲貴的大山裡去了。後人對蚩尤是不公平的。……一九九一年十一月上旬、河南省省長助理楊光喜電話通知我、「老王、國家民委第一副主任到河南來視察、他想見見你、明天中午請你到中州賓館吃飯」。參加這次午餐的、有河南省人代副主任林曉、國家民委第一副主任趙延年 and 秘書共四人。我們見面寒暄過後、他說「我這次回到河南來、聽說要在我的家門口興建炎黃二帝巨塑、這是甚麼意思。這是不利于民族團結的、這個問題你考慮過沒有。關於炎黃子孫這個提法不確切。近幾年國家領導人多次找人談話、但仍有個別領導在会上講炎黃子孫。現在北京搞了一個炎黃芸術館、河南又在興建炎黃二帝巨塑、這恐怕不利于民族團結吧。歷史上大漢民族的代表炎黃二帝、曾對別的民族進行過侵略・統治・壓榨、今

天再提出炎黃二帝、就會引起其他民族的不滿。現在西藏的達賴喇嘛、在國外一直活動、說中國分幾大塊、西藏是一個國家、蒙古是一個國家、東北是一個國家、中間才是漢民族的中國。在這種情況下你要搞炎黃二帝、將會對民族的團結產生不应有的作用。他地位頭赫、措辭激烈。……一九九四年、河南省文化庁転來了全國人大貴州代表關於興建炎黃二帝巨塑的提案。提案提出炎黃蚩都是中華民族的祖先、興建炎黃二帝工程不利於民族團結、應興建炎黃蚩三人巨塑」である。

- (79) 「河南省炎黃文化研究会關於申請擬制『炎黃二帝』電視連續劇的設想方案・討論稿（一九九二年十二月三十日）」、李準ほか「電視劇連續劇『炎黃二帝』報告書（一九九四年二月二十八日）」、中共河南省委宣傳部常務副部長葛紀謙ほか「『炎黃二帝』電視劇本前言（一九九四年十月一日）」、中共河南省委宣傳部ほか「電視劇『炎黃二帝』劇本徵求意見的函（一九九四年十月二十日）」、原河南省博物館長許順湛ほか「關於『炎黃二帝』電視劇本的建議（一九九四年六月十五日）」、中國社科院歷史研究所所長李學勤「閱『炎黃二帝』電視劇本後的來信（一九九四年）」、許順湛ほか「『炎黃二帝』電視劇本二稿閱後的意見（一九九四年十一月二十四日）」前掲註64『文件資料匯編（一）』一七七～一九六頁。

- (80) 前掲註62『大河魂』三二七～三三〇頁。

- (81) 前掲註6『苗』から「苗族（ミャオ族）」へ「二六三～二六五・二七六頁註23「廣播電影電視部司局文件——一九九七年第四九号」、「炎黃子孫」と「中華民族」一二二～一二四頁、および「蚩尤平反」与「炎黃子孫」一〇三～一〇四頁。当該文書の原文は、「廣播電影電視部總編室給第八屆全國人大代表龍明伍・張明達兩位同志的復函（一九九七年五月二日）」貴州苗学研究会秘書処編『苗学研究通訊』八、貴陽・同処、一九九七年、六～七頁に掲載。張明達は貴州省東南部の台江県出身の苗族で、龍明伍は筆名伍略、貴州省東南部の凱里市出身の苗族である（前掲註37『苗族人物』二二三～二二四頁、および貴州省苗学会編『苗族人物（二）』貴陽・同学会、二〇〇六年、一七七～一七八頁を参照）。

- (82) 葉介甫「海内外中華兒女」提法的由来「人民政協報」二〇一〇年（日付不明、筆者未見）。当該論文の一部分は『共產黨員』十八、瀋陽：中共遼寧省委、二〇一〇年、五七頁に掲載。原文全体は中国インターネットサイト「中国共产党新聞網」<http://dangshi.people.com.cn/GB/85040/1216361.html>（二〇一六年四月十七日閲覧）を参照。

- (83) 葛劍雄「炎黃子孫不是中華民族・中國人民的同義詞」『光明日報』一九八九年七月五日第三版、および葛劍雄「炎黃子孫之我見」附記（一九九五年七月十五日）『往時和近時』北京：三聯書店、一九九六年（二〇〇七年再版）、十七～三一頁。

「涿鹿」の歴史は誰のものか

- (84) 「江沢民与台湾「統聯」訪問団共話祖先統一」『人民日報』一九九〇年三月十二日第一版（後に『瞭望』十一、北京・新華出版社、一九九〇年三月十九日、四〇六頁に再収録）。李廷貴「中国史学研究的又一重大成果——伍新福著『中国苗族通史』讀後」および「読影視文学劇本『飛將軍李広』」（共に李廷貴「散文閑賦」北京・中国戯劇出版社、二〇一一年、九八〜一〇二頁に再収録）には、苗族エリートがこの江沢民の発言を高く評価したことを示す記述が見える。
- (85) 中華炎黄文化研究会學術委員會編『炎黄文化參考資料』一、北京・同委員會、一九九二年四月二八日。
- (86) 「中華炎黄文化研究会常務副會長馮征在河北省炎黄文化研究会成立大会上的講話（一九九三年七月八日）」『河北省炎黄文化研究会會刊』一、石家莊・河北省炎黄文化研究会辦公室、一九九四年三月、十〜十二頁。
- (87) 「関于一九九五年工作計劃要点（一九九五年二月二七日常務辦公會議通過）」『中華炎黄文化研究会會刊』五、北京・同研究会、一九九六年、三四〜三五頁、および前掲註31「會議紀要」。同研討会が、中華炎黄文化研究会によってその主催（「主辦」事業の一つと認識されていたことについては、「本会歷年主辦的學術活動一覽表」中にそれが含まれていることから明らかである。前掲註68『中華炎黄文化研究会會刊』八、三二〜三三頁參照。
- (88) 「中華炎黄文化研究会工作報告」前掲註87『中華炎黄文化研究会會刊』五、三五〜三九頁。
- (89) 前掲註82「海内外中華兒女」提法的由来」、および米根孝「五千春秋話蚩尤」『中国民族報』二〇〇九年三月三日第八版。
- (90) 前掲註82「海内外中華兒女」提法的由来」。
- (91) 葛劍雄「『國家級』公祭黃帝質疑」『南風窓』二四三、廣州・南風窓雜誌社、二〇〇三年、六十〜六十一頁（改題して葛劍雄「冷眼熱言——葛劍雄時評自選集」長春・長春出版社、二〇〇七年、二四三〜二四五頁に再収録、および羅樹杰「中華民族始祖爭論与民族團結」『中央民族大学学报（哲学社会科学版）』二、北京・同大学、二〇〇七年、四八〜五二頁。
- (92) 前掲註24「訪華日記」十八・四六・六十頁。中華炎黄文化研究会成立時の目標の一つとして『中華文化通志』編纂が掲げられていたことについては、前掲註61蕭克「弘揚中華民族優秀文化」を參照。
- (93) 高志升「從黃帝陵到三祖堂」前掲註24『千古文明開涿鹿』三九〜四一頁。
- (94) 一九九五年の「全国首届涿鹿黃帝・炎帝・蚩尤三祖文化學術研討会」には、王朝文が全国人民代表大會常務委員・貴州省人民代表大會主任として祝辭を寄せた（前掲註31「會議紀要」）。陳靖の名は出席者一覽中に見えないが（前掲註10『涿鹿県志（一九八九〜二

〇〇九」一一八～一一九頁）、涿鹿での研討会の開催時期に、貴州で「論苗族在中華民族發展中的貢獻」という論文を発表し（陳靖「論苗族在中華民族發展中的貢獻」『貴州日報』一九九五年九月二七日第七版）、それは後に前掲註31「先秦史研究動態」一、十～十四頁に再収録されている。以後、一九九七年十月の中華三祖堂の落成および「三祖塑像」の除幕式には、涿鹿県と姉妹県となった貴州東南部の台江県の幹部が参加し（前掲註11「涿鹿県志（重修統修版）」五十頁）、王朝文の委託を受けて出席した呉世華が祝辞を読み上げた（呉世華「三祖堂」落成是中華民族發展史上光輝的一章——在河北涿鹿「三祖堂」落成揭幕式上的講話（一九九七年十月四日）」前掲註18「苗学研究通訊」九、一四三～一四四頁）。そして陳靖・王朝文・張明達らは、翌一九九八年の七月に中華三祖堂で開催された「張家口市首屆旅游文化節暨涿鹿中華三祖堂開游儀式」に出席（前掲註46「苗族紅軍作家 陳靖作品選」口絵図版参照）、式典では王朝文が祝辞を読み上げ（王朝文「感受中華文明神韻（一九九八年七月二五日）」貴州省苗学会秘書処編『苗学研究通訊』十一、貴陽・同学会、二〇〇〇年、六頁（後に貴州省苗学会編『王朝文文集 貴陽・貴州民族出版社、二〇〇八年、八頁に再収録））、貴州民族歌舞団が苗族歌舞を上演した（前掲註10「涿鹿県志（一九八九～二〇〇九）」二二頁）。その翌日に涿鹿県城で中国先秦史学会・中華炎黄文化研究会・貴州省苗学研究会・涿鹿中華炎黄三祖文化研究会などが共催した「全国第二屆中華炎黄三祖文化研討会」にも複数の苗族エリートたちが出席、貴州東南部の凱里市出身の苗族で貴州省苗学研究会常務副会長の民族学者、李廷貴が開会の挨拶（『千古文明開涿鹿——全国二屆中華炎黄三祖文化研討会開幕詞』前掲『苗学研究通訊』十一、十五～十六頁）を、王朝文が祝辞（『王朝文・追尋中華文明融匯統一源頭、促進中華民族大團結（一九九八年七月二六日）」前掲『苗学研究通訊』十一、四～五頁（前掲『王朝文文集』九～十頁に再収録））を、陳靖が創作した七言律詩をそれぞれ読み上げ、貴州の若手学者である呉正彪と麻勇斌らが論文を発表した（『全国三祖文化學術研討会在河北涿鹿舉行——同時舉行「三祖堂」開游儀式』前掲『苗学研究通訊』十一、一～二頁）。一方、一九九六年に貴州畢節で開催された「畢節地区苗学研究会第三次學術年会」には、招聘を受けた中共涿鹿県委・涿鹿県人民政府は祝辞を寄せ（中共涿鹿県委ほか「賀信」畢節地区苗学会編『苗学研究通訊』貴陽？…不明、一九九九年、三九頁）、一九九八年に貴州で開かれた「苗年聯歡会」に際しても、招聘を受けた涿鹿県委副書記任昌華・同県旅游局長趙育大が祝電を寄せている（『涿鹿県委副書記任昌華・旅游局長趙育大祝賀九八苗年』前掲註18「苗学研究通訊」九、一七九～一八〇頁）。一九九〇年代を通じて、両地の間で交流が続いたことを物語る。李廷貴については、前掲註81「苗族人物（二）」五〇〇～五〇二頁を参照。呉正彪が貴州省中部の三都・丹寨・都勻県境界地出身の苗族で、麻勇斌が貴州省東北部の松桃県出身の苗族であることについては、前掲註81「苗族人物（二）」五

「涿鹿」の歴史は誰のものか

三六〇五三八・七九三〇七九五頁参照。

【付記】本論文は、平成二四〇二六年度科学研究費補助金（基盤研究B）「一九二〇年代から一九三〇年代中国周縁エスニシテイの民族覚醒と教育に関する比較研究」（代表…松本ますみ）、平成二七・二八年度科学研究費補助金（基盤研究C）「中国共産党と多民族史論」（代表…吉開）、および平成二七・二八年度科学研究費補助金・新学術領域研究（研究領域提案型）「稲作と中国文明」（代表…中村慎一）による研究成果の一部である。内容の一部は、「近代中国民族起源話語問題」（香港科技大学華南研究中心、二〇一二年六月二十日）、「涿鹿の戦」は誰の歴史か——中華民族主義と苗族復興運動の今日」（北海道大学東洋史談話会、二〇一六年五月二日）で口頭発表したことがある。出席者からの貴重なご意見に感謝する。文献収集・現地調査の過程では、国家図書館・故宮博物院・中央研究院歷史語言研究所・国立台湾大学、および東京大学・東洋文庫・本学附属図書館から各種便宜を賜った。お世話になった各機関・各位に感謝する。

【図版出典】写真1〜4・8…筆者撮影、写真5…前掲註63『十年歷程』二四頁写真三を筆者加工、写真6…前掲註24『訪華日記』口絵図版を筆者加工、写真7…前掲註35『中華三祖聖地』二七頁図版を筆者加工、写真9…前掲註29『尋祖覓宗訪涿鹿』（「中国苗族網」〔360doc 個人図書館〕転載）、挿図、写真10…前掲註46『苗族紅軍作家 陳靖作品選』表紙、写真11…前掲註63『十年歷程』十六頁写真を筆者加工、写真12…炎黃天地編輯部編『炎黃天地』増刊、鄭州…同編輯部、二〇〇七年、九頁図版を筆者加工、写真13・14…前掲註62『大河魂』口絵図版を筆者加工、写真15…前掲註62『開拓』口絵図版を筆者加工。

【補論】脱稿後、涿鹿県政府のインターネットサイト「中華三祖文化」の記事「任昌華」の存在を知った（<http://www.sculpture.cn/d276337583.htm>、二〇一六年十月十三日閲覧）。そこには、「一九九三年……十月十七日、中国（国務院 公共關係部（文化部））副部長の劉徳（有？）が涿鹿を視察、任昌華は劉徳（有？）を接待する際に初めて「三祖文化」の観点を提出し、……一九九四年十一月から「三祖文化」は正式なスローガンとして打ち出されるようになった。任昌華は「三祖文化始説」を書き上げ、《中国政協報》『人民日報』《貴州日報》およびフランス・東南アジアなど内外のメディアに相次いで掲載された」とある。一九九三年四月の《公祭軒轅

黄帝大会」举行、それに続く中共北京市幹部李庚の関与、および一九九四年十月の河南省炎黄文化研究会一行、王朝文一行による現地訪問、そして翌十一月の陳靖による中国社会科学院院長胡繩への上書を重視した、本論文前半部分の議論を補完し、ここでの推測を裏付ける記事である。